

藝術研究所
研究調査報告書

1

1999

大阪芸術大学藝術研究所

発 刊 の 辞

大阪芸術大学藝術研究所

所長 新田 博衛

『研究成果報告』第1輯をお届けいたします。

当研究所は昭和48年4月に設置されました。平成5年大学院芸術文化研究科の発足に伴ない、その事業の一環として、学内から研究調査の計画を公募し、研究所運営委員会が適当と認めた計画にたいして補助費を支給することになりました。

補助費を支給されて研究調査を行なった者は年度毎にその成果を報告する事が義務付けられております。ここに編集発行いたしましたのは平成5年度より同10年度にいたるまでに提出された成果報告の総てであります。

来年度以降は隔年に『研究成果報告』を発行いたします。そこには当研究所の他の事業である「教員研究発表会」に関する記事も併せて掲載する予定であります。

以上

藝術研究所研究調査完結研究課題一覧表
(平成5年～10年度迄)

研究代表者	研究ディレクター	研究課題	研究年度(平成)	頁数
藪 亨	藪 亨	絵入り総合芸術誌『ザ・ステューディオ(The Studio, Vols. 1-76, London 1893-1919)』の調査研究および記載記事・図版のデータベースの構築	5	4
山田 幸平	豊原 正智	映画学のための基礎研究 —資料の整理・分析と問題提起—	5～6	6
北村 文雄・ 稲田 尚之	清水 正之	環境芸術研究史	5～7	9
谷村 晃	谷村 晃	大阪芸術大学音楽学資料のデータベース化に関する研究	5～7	13
馬淵卯三郎	馬淵 卯三郎	フィールドワークにおける映像記録の方法論とそのデータベースのCD-ROM化及び報告のLD化に関する研究	5～7	16
森 淳	井 関 和 代	西アフリカ・ギニア湾沿岸地方の伝統工芸の研究	5～7	19
北村 文雄・ 稲田 尚之	駒 井 古 実	大阪芸術大学およびその周辺の「場」の研究 —自然科学と芸術の融合の試み—	6～7	22
長野 克亮・ 山田 幸平	田 中 敏 雄	多媒体利用における本学の教材の研究と開発 —ブレッソンの芸術—	6～7	25
藪 亨	藪 亨	大阪芸術大学図書館所蔵のヴィクトリア朝時代の挿絵本と絵入り芸術雑誌の調査研究	6～8	30
山田 幸平	野 田 燎	音楽運動療法理論の実践と応用—パーキンソン病患者及び痴呆症患者、老人病への応用実践—	6～8	33
山田 幸平	豊原 正智	映像学研究(1)—映画における歴史性と地域性—	7～8	36
馬淵卯三郎	馬淵 卯三郎	民俗芸能伝承の構造	8	39
谷村 晃	谷村 晃	大阪芸術大学音楽学資料のデータベース化と、その公開利用に関する研究	8～9	41
藤本 康雄	藤本 康雄	西洋中世・古代の建築・庭園・都市環境に見る尺度構成理念に関する調査研究	8～9	43
馬淵卯三郎	志 村 哲	コンピュータ・ネットワークを活用したマルチメディア教材による教育システムの開発	8～9	47
山田 幸平	遠 藤 賢 治	映像基礎教育のあり方とその実践方法について	8～9	50
清水 正之	清水 正之	環境デザインにおける計画と芸術の関係に関する研究 —大阪の風土と造形—	8～10	53
清水 正之	駒 井 古 実	身近な自然をモチーフとした環境教育と造形教育の可能性の研究	8～10	57
出原 栄一	福 田 肅	大阪芸術大学所蔵「蓄音機デザイン調査研究」のための基礎資料作成	9	61
月溪 恒子	中山 一郎	能面の音響特性とその音声への影響	9～10	66
藪 亨	田 中 敏 雄	多媒体利用による本学の教材の研究と開発 —大阪府下の民家—	9～10	69
藤本 康雄	藤本 康雄	中近東・アジアの古代建築・庭園・都市環境に見る尺度構成理念に関する調査研究	10	72

「絵入り総合芸術誌『ザ・ステューディオ (The Studio, Vols. 1-76, London 1893-1919)』の調査研究および記載記事・図版のデータベースの構築」

研究年度・期間：平成5年度

研究代表者：藪 亨

(教養課程 教授)

研究ディレクター：藪 亨

(教養課程 教授)

共同研究者：高橋 亨 田中 敏雄 福本 繁樹 山形 政昭 笹谷 純雄

(美術学科 教授) (教養課程 教授) (工芸学科 助教授) (建築学科 助教授) (文芸学科 講師)

水島ヒロミ 木村 和実

(文芸学科 講師) (大学院 助手)

研究補助者：東野 真紀 山口 真理

(大学院 副手) (大学院 副手)

研究報告

研究経過の概要

『ステューディオ —— 純粋美術と応用美術の絵入り雑誌 (The Studio —— An Illustrated Magazine of Fine & Applied Art)』は、前世紀の90年代始めにロンドンにおいて創刊された。創刊当初から当誌は、美術の諸動向を広く包括的に伝え、造形芸術の古典的な諸分野のみならず、これらと同等に装飾美術や工芸あるいは新しいグラフィック・アーツや写真芸術をもちいち早く積極的に扱い、国際的に強い影響力を有した。したがって、世紀転換期の美術・工芸・建築の新しい諸動向とその展開を研究する上では、今日なお最も重要な史料のひとつである。幸い本学図書館には、その創刊から1919年にいたるまでの総計76巻が所蔵されている。そこで本研究は、本学の工芸史・美術史・建築史の専門研究者たちが定期的に集まり、当史料を総合的に調査研究し、またこれに関連する基本的な図書資料を収集し、さらには当史料についてのデータベースの構築を推進することを目的とした。

そのため、本研究代表者は、『ステューディオ (Vols. 1-76, 1893-1919)』誌の特別貸し出しを申請し、その許可を受け、本研究期間中これを大学院美学美術史研究室にて保管した。そして共同研究者たちはそこに定期的に集まり、それぞれの専門的な見地から協力して当史料を調査し研究した。また、本調査研究に必要な関連図書資料を収集し購入した。さらに、研究補助者の協力を得て総目次および掲載記事や挿絵・図版などの索引の作成を進めた。さらにまた、幾人かの本学大学院生を作業補助者として、『ステューディオ』誌の主要な挿絵・図版の写真撮影を行い、スライド資料を作成した。そして、フォトCD資料の作成に向けて、これらスライド資料を、絵画、彫刻、グラフィック、工芸、建築、写真そして日本趣味などのいくつかのテーマに分けて系統的に整理する作業を進めた。

研究成果について

19世紀末にアール・ヌーヴォーの台頭と共に刊行された多彩な絵入り総合芸術雑誌は、オリジナルなグラフィック作品を擁する文芸雑誌群と、写真図版を活用しながら美術の諸問題を広く論じた美術批評雑誌群とに分けることができる。『ステューディオ』誌は、この後者の代表格であった。また前者の代表格のひとつに『イエロー・ブック』（1894-7）誌があるが、幸いにもこれが入手出来たので、両者の比較研究を推進した。

また、『ステューディオ』誌上では、様々な筆者が、豊富な写真資料を駆使して、日本の美的文化、すなわち浮世絵、工芸、生け花や庭園などについて、数多くの論評を寄せている。従って、当誌に掲載された関連記事を調査することで、当時の西欧での「日本趣味」の研究を今後さらに推進して行く上での貴重な手掛かりを得た。さらにまた、アフリカや南太平洋の工芸に関する論評や報告も当誌は掲載しており、民族学的にも注目すべき研究資料が見いだされた。そのみならず『ステューディオ』誌上のいくつかの記事には、美術としての写真とその理論についての当時の実情が如実に示されており、当方面の研究資料を充実することができた。

そしてまた、『ステューディオ』誌は、近代工芸運動の発達と強い結び付きがあり、ウィリアム・モリスを会長とする『アーツ・アンド・クラフツ展覧会』を積極的に支援した。幾人かの論者が、この展覧会への多彩な出品物に関して、これらの写真を添えて幾度も報告しており、イギリスの近代工芸についての最新情報が世界に向けて発信されることになったのである。こうした論評や報告を調査研究することで、当代の装飾芸術の実相と工芸理論についての研究を今後さらに推進して行く上での有効な手掛かりを得ることが出来た。

かくして、『ステューディオ』誌に関するデータ・ベースの構築を推進し、今後ヴィクトリア朝時代の芸術文化のパラダイムを総合的に解明して行くに向けての研究基盤を固めた。

研究の反省

アール・ヌーヴォーの出現を逸早く誘った『ステューディオ』誌は、90年代初めにおける純粋美術と応用美術との緊張関係の高まりを背にして創刊されており、その後、種種の曲折を経て今日にまで至っている。従って、当誌出現の意義や特殊性について、共同研究者が共通の理解を得た上で、さらに各個のテーマに則して調査研究を開始するまでには、当初予定した以上の討論の時間を要した。しかも、今回の調査対象となった史料には、創刊されたヴィクトリア朝末期のものだけでなく、これに続くエドワード7世時代を経て、さらには第1次世界大戦終了時までのものが含まれていた。しかし、本史料の調査研究が進むにつれて、ヴィクトリア朝時代の芸術文化や、世紀転換期の美術やデザインに関する貴重で豊富な情報源としての、本史料の価値に圧倒されて行った。そして、今回は準備期間が限られていたこともあって、短縮された当年度の研究期間においては、ヴィクトリア朝時代以外をも含んでいた当初の計画のすべてを十分に実行することが至難であることを痛感させられた。当年度において不十分であったところは、今後における調査研究の機会を期したい。

「映画学のための基礎研究」
—資料の整理・分析と問題提起—

研究年度・期間：平成5年度～平成6年度

平成5年度

研究代表者：山田 幸平

(文芸学科 教授)

研究ディレクター：豊原 正智

(芸術学部 助教授)

共同研究者：吉岡 敏夫

(芸術学部 助教授)

上倉 庸敬

(大阪大学 文学部 助教授)

平成6年度

研究代表者：山田 幸平

(文芸学科 教授)

研究ディレクター：豊原 正智

(芸術学部 助教授)

共同研究者：武谷なおみ

(芸術学部 助教授)

吉岡 敏夫

(芸術学部 講師)

山田 兼士

(芸術学部 講師)

研究助言者：上倉 庸敬

(大阪大学 文学部 助教授)

研究補助者：池本 幸司

(大学院 副手)

研究経過の概要

前年度（平成5年度）に引き続き文献、作品などの資料の蒐集及びそれらの整理・分析が行われた。哲学的問題意識からブロッホ、ドゥールズ、ガタリ等の文献が集められ、特にドゥールズに関しては、1983年にCinéma 1、1985年にCinéma 2がフランスで出版されて以来、日本でも映画学研究者の間で注目され、それに関する研究発表も行われつつある。また、比較的少ない初期写真・映画史の文献、日本映画関係の資料並びにコクトー、デュラスなど個別的な文学—映画に関わる文献及び脚本の資料が補足的に蒐集され、それらの整理・分析が行われた。

作品資料購入もさることながら、最近では衛星放送による過去の映画の放映が活発に行われており、それからの作品の録画は当研究者たちにとっても貴重な資料となり、積極的な蒐集が行われた。特にアジア映画（中国、台湾、韓国、香港等）、最盛期の日本の東映、大映、松竹等の映画会社、監督、ヨーロッパの監督、アメリカ西部劇等々の特集は大変有益な資料となった。

文献蒐集に関しては、直接東京での蒐集調査も有意義であった。また、東京国立近代美術館フィルムセンター、写真美術館での調査研究、その他研究打ち合わせなどの為研究出張を行った。

研究会として、4月から2月まで、全体の研究打ち合わせ会議を2回、グループごとの研究会を10回行った。今年度も日本映画に関して、脚本家、美術監督、俳優等に、研究助言者を交えて直接話を聴く機会をもった。

今年度は東京国際映画祭が京都で開催され、共同研究者は積極的に参加し、作品並びにその

監督との質疑応答を直接聴くことができ、特にアジア映画のレベルの高さを実感できた。またそれに関連した京都での日本映画の歴史、誕生に関する文献資料がいくつか出され、蒐集し、それについての研究会も特に行った。

研究成果について

本研究の目的は、映画学の研究に向けて、本学の文献並びに作品資料の上にさらに必要な資料を蒐集し、それらの整理・分析を通じて、共同研究者それぞれが、それぞれの立場から、基礎的な問題点を明らかにし、その後の映画学研究のパースペクティブを形成しようとするものであった。前年度に引き続き補足的な資料蒐集が行われ、整理・分析されたが、ヨーロッパ特にフランス、ドイツの、映画－哲学・美学、映画－文学・文芸学関係、アメリカ映画及び初期の歴史、また日本映画初期の歴史に関する文献及び作品などの蒐集に関して一定の成果をあげることができた。また研究会を通して、実際の撮影現場や映画監督、脚本家、撮影監督、美術監督、俳優等への直接的な取材によって、限定的ではあるが過去及び現在の日本映画の状況について研究の資料と方向の手がかりが得られたのではないだろうか。作品研究に関して、山田（兼）は成果の一部を日本映像学会関西支部研究会において、「ボードレリアンとしてのジャン・コクトー映画「詩人の血」「オルフェ」「オルフェの遺言」の詩学―」として発表した。その他、研究者は映画雑誌（「FB」等）を通して研究成果の一部を発表した。

2年間の本研究を通じて、研究会において、特に基礎的な文献及び具体的な作品に関する過去の研究資料の不足が問題として出された。特に百年という短い映画の歴史にもかかわらず、洋の東西を問わず映画史初期の具体的作品に関する資料については少なくまだ不明な部分もあり、最近増えつつあるとはいえ、今後の映画学の体系化に向けて蒐集が不可欠であろう。同様にそこでの研究が盛んにならなければならない。また同時に現代テクノロジーの直接的な影響をうけて様々な変化を遂げつつある現代の映画についても単なる文化現象としてとらえることなく、めまぐるしく変貌を遂げようとしているだけにしっかりした基礎を築き、映画の理論武装がなされなければならないだろう。そのためには美学・芸術学、文芸学を始めとして、広い意味での「映画哲学」が求められるのではないか。その方向での本学の文献、作品資料の充実が望まれる。

研究の反省

既に研究成果において述べられているように、本学における映画関係の文献、作品資料はまだまだ不十分である。本研究においてもそれは当初から明らかであり、積極的かつ多面的なそれらの蒐集が試みられ一定の成果はみられたが、「基本的な」、「体系的な」蒐集がなされたとは必ずしも言い難い。それは歴史の浅さと多様な側面をその理由に挙げることは簡単だが、何よりも「学」としての映画研究の方法論の欠如、従って「学」としての研究の浅さが挙げられる。体系化を言う前にそのような方向での地道な研究の積み重ねが必要に思われる。明確なそ

のパーспекティブの形成は必ずしもできなかったが、今後の課題として、新たな研究体制の中でそれをめざしたい。

今回の研究メンバーは多彩で、実にお互いが刺激を得ることが多かった。しかし一方でコミュニケーションの不足もやや見られ、十分な相互補完的体制ができなかった点は反省材料である。また資料集の作成が未完に終わったが、それは今後新たな研究体制の中に引き継がれるだろう。一部、阪神大震災の影響で最後のまとめが十分できなかった面もあった。

「環境芸術研究史」

研究年度・期間：平成5年度～平成7年度

平成5年度

研究代表者： 稲田 尚之
(芸術文化研究科 教授)
北村 文雄
(芸術文化研究科 教授)
研究ディレクター： 清水 正之
(環境計画学科 教授)
共同研究者： 荒木 正典
(環境計画学科 教授)
田端 修
(芸術文化研究科 教授)
松久 喜樹
(環境計画学科 助教授)
吉原 卓男
(環境計画学科 助教授)
下休場千秋
(環境計画学科 講師)
柿沼 祐太
(環境計画学科 助手)
福原 成雄
(環境計画学科 講師)

平成6年度

研究代表者： 稲田 尚之
(芸術文化研究科 教授)
北村 文雄
(芸術文化研究科 教授)
研究ディレクター： 清水 正之
(環境計画学科 教授)
共同研究者： 荒木 正典
(環境計画学科 教授)
田端 修
(芸術文化研究科 教授)
松久 喜樹
(環境計画学科 助教授)
吉原 卓男
(環境計画学科 助教授)
下休場千秋
(環境計画学科 講師)
柿沼 祐太
(環境計画学科 助手)
福原 成雄
(環境計画学科 講師)

平成7年度

研究代表者： 北村 文雄
(芸術文化研究科 教授)
研究ディレクター： 清水 正之
(環境計画学科 教授)
共同研究者： 荒木 正典
(環境計画学科 教授)
稲田 尚之
(芸術文化研究科 教授)
田端 修
(芸術文化研究科 教授)
ハーヴィム シャピロ
(環境計画学科 教授)
松久 喜樹
(環境計画学科 助教授)
吉原 卓男
(環境計画学科 助教授)
若生 謙二
(環境計画学科 助教授)
下休場千秋
(環境計画学科 講師)
福原 成雄
(環境計画学科 講師)
柿沼 祐太
(環境計画学科 助手)

研究経過の概要

環境芸術は、人間と環境との関わりについて、美や快適性などの観点から表現する活動、またはその成果といえよう。この分野は古くから存在してきたが、研究対象として十分なとりくみがなされてきたとはいえ、今後発展が期待される分野である。そのため今回は、環境芸術に関する分野として、造園、建築、都市、地域を主にとりあげて、それぞれについて国内外の関連分野からの学術論文、文献、資料の収集を行い、データベースソフトを用いて、その整理・分類を行うこととした。

対象とした文献は、造園学雑誌（1925－1927）、造園研究（1931－1940）、造園雑誌（1934－1994）、日本造園学会春季・秋季大会研究発表要旨集（1977－1982）、日本造園学会研究発表論文集（1983－1994）都市計画（1955－1995）、日本都市計画学会学術研究発表会論文集（1977－

1994)、建築雑誌 (1924-1994)、日本建築学会論文報告集 (1958-1994)、土木学会誌 (1966-1991)、土木計画学研究論文集 (1969-1991)、農村計画 (1991)、風景 (1949)、都市公園 (1969)、都市公論 (1936-1937)、都市問題 (1954-1957)、都市問題研究 (1962-1970)、ランドスケープ (1969-1971)、公園緑地 (1949-1970)、国立公園 (1937-1971)、日本庭園 (1956-1970)、新園芸 (1951)、緑化 (1949)、ガーデン (1959)、建築史研究 (1964)、建築文化 (1969-1970)、建築と社会 (1960-1968)、新建築 (1965-1966)、国際建築 (1959-1965)、新都市 (1951-1968)、SD (1966)、ジュリスト (1966)、スペース・デザイン (1964)、観光 (1942-1971)、観光研究 (1960-1961)、国際観光 (1940-1952)、国土 (1960-1970)、千葉大学園芸学術報告 (1964-1965)、道路 (1959)、地域開発 (1966-1971)、地理 (1964)、人文地理 (1955)、不動産研究 (1971)、宅地開発 (1969)、区画整理 (1960) などの学術雑誌及び専門雑誌とそれぞれの分野の関連文献である。

研究成果について

研究成果は次のようである。

環境芸術研究の流れを概観するために、平成5年度から7年度にかけて、学術論文、文献、資料の収集を行い、データベースソフトによりこれらの資料整理を行う体制を整えた。資料整理に関しては、文献を著書、研究論文、報告、総説、評論に類別し、それぞれについて図-1のように摘要、キーワード、トピックスを作成してそれらのデータベース化を行った。平成6年度からは国外の関連文献、資料の収集とそのデータベース化に着手し、平成7年度はこれらに重点をおいてデータベース化を行った。

以上をもって、環境芸術に関わる造園、建築、都市、地域に関する内外の関連分野からの学術論文、文献、資料の一応のデータベース化を完了した。成果はフロッピーディスクに収録され、今後の研究活動に供される。

研究の反省

研究対象の関連分野が広く、文献が多岐にわたるため、すべての文献に対する摘要の作成は充分になされたとはいいがたい。また、各部門でキーワードに対する認識の相違がみられたため、各部門におけるキーワード概念の統合化が必要とされよう。国外の文献については、367の文献のデータベース化を行ったが、これらのすべての文献を入手することは困難であったため、摘要の作成は限定されたものとなっている。研究論文、文献のデータベース化は継続して行う必要があるため、今後も上記の課題にとりくむとともに、継続してデータベースの充実を図り、院生、学生の利用にも役立てるものとした。

著者名		かわい せいいち 河合 正一		登録番号	建築0181
題名		近代建築の理解のために —歴史+デザイン— 敘説		フィールド	建築環境
第一報				発表形態	論文
刊行地	発行所	発行年月	1954年	担当	清水
発表誌名	建築雑誌	69巻 809号 ~ 1頁	4	記録者	I. N. S
				記録日	94.2.10
				保管場所	

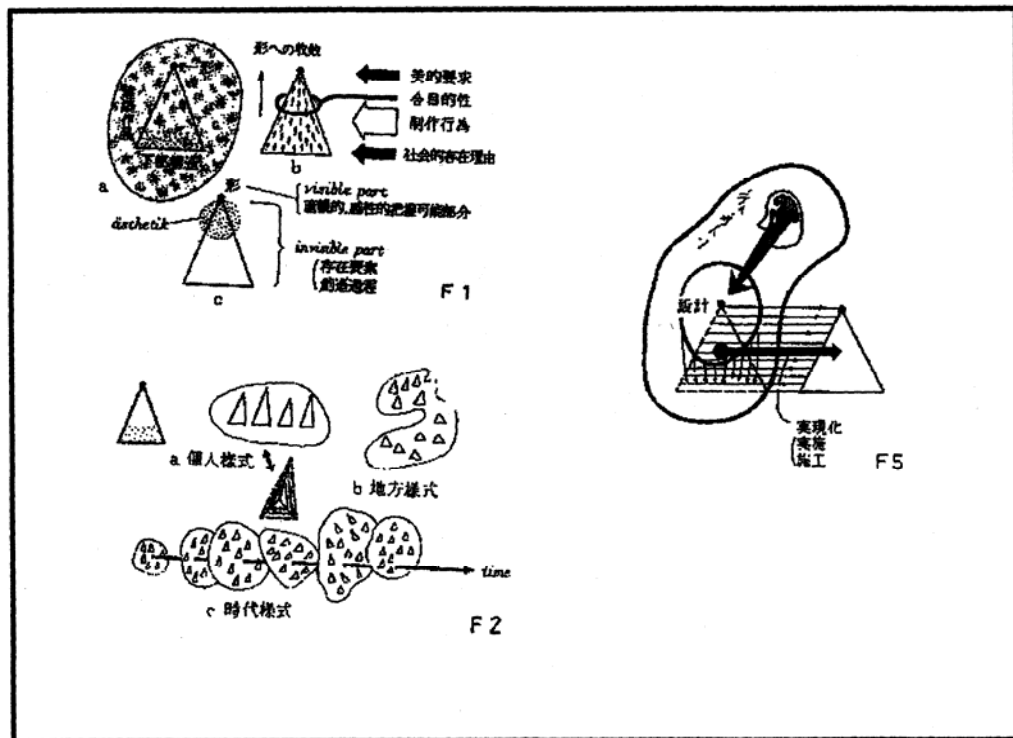
概要

建築作品を三角形に考え、底辺を社会的・経済的基盤、下部構造とし、頂点が具体的な建築物そして底辺と頂点を結ぶ空間を方法、材料などを示すものとして、下部構造を含めた三角形の形態により個人様式が峻別でき、地方様式、時代様式が成立するとしており、建築史の方法もデザインについてもこの展開により説明している。近代建築について如何なる基礎構造に於いても成立し得る客観的、理論的、組織的な構成方法を打ち立てようとしたが芸術性の頂は過去の典型様式の頂にまだ至っていないとし、その建築形態、日本のソシアル・リアリズムの問題に言及している。

キーワード

近代建築 下部構造 様式 歴史 デザイン

トピックス



「大阪芸術大学音楽学資料のデータベース化に関する研究」

研究年度・期間：平成5年度～平成7年度

平成5年度

研究代表者：谷村 晃
(音楽教育学科 教授)

研究ディレクター：谷村 晃
(音楽教育学科 教授)

共同研究者：月溪 恒子
(音楽学科 教授)
馬淵卯三郎
(音楽学科 教授)
森 淳
(教養課程 教授)
樋口 光治
(音楽教育学科 助教授)
芹澤 秀近
(芸術計画学科 講師)
木原 俊哉
(音楽教育学科 講師)
志村 哲
(音楽学科 講師)
中川 暎量
(舞台芸術学科 講師)
前川 陽郁
(音楽教育学科 講師)
加藤 由紀
(音楽学科 非常勤講師)
木村 和実
(大学院 助手)
高島 克己
(大学院 助手)
研究補助者：石川 貴史
(大学院 副手)
池本 幸司
(大学院 副手)
西谷 陽二
(大学院 副手)
西谷美加子
(大学院 副手)
東野 眞紀
(大学院 副手)

平成6年度

研究代表者：谷村 晃
(音楽教育学科 教授)

研究ディレクター：谷村 晃
(音楽教育学科 教授)

共同研究者：月溪 恒子
(音楽学科 教授)
馬淵卯三郎
(音楽学科 教授)
森 淳
(教養課程 教授)
樋口 光治
(音楽教育学科 助教授)
木原 俊哉
(音楽教育学科 講師)
志村 哲
(音楽学科 講師)
芹澤 秀近
(芸術計画学科 講師)
中川 暎量
(舞台芸術学科 講師)
前川 陽郁
(音楽教育学科 講師)
木村 和実
(大学院 助手)
高島 克己
(大学院 助手)
研究助言者：加藤 由紀
(音楽学科 非常勤講師)
研究補助者：池本 幸司
(大学院 副手)
田口 雅英
(大学院 副手)
西谷 陽二
(大学院 副手)
西村美加子
(大学院 副手)
東野 眞紀
(大学院 副手)

平成7年度

研究代表者：谷村 晃
(音楽教育学科 教授)

研究ディレクター：谷村 晃
(音楽教育学科 教授)

共同研究者：月溪 恒子
(音楽学科 教授)
馬淵卯三郎
(音楽学科 教授)
森 淳
(教養課程 教授)
樋口 光治
(音楽教育学科 助教授)
木原 俊哉
(音楽教育学科 講師)
志村 哲
(音楽学科 講師)
芹澤 秀近
(芸術計画学科 講師)
中川 暎量
(舞台芸術学科 講師)
前川 陽郁
(音楽教育学科 講師)
木村 和実
(大学院 助手)
高島 克己
(大学院 助手)
研究助言者：加藤 由紀
(音楽学科 非常勤講師)
研究補助者：池本 幸司
(大学院 副手)
西谷 陽二
(大学院 副手)
西村美加子
(大学院 副手)
東野 眞紀
(大学院 副手)
廣瀬 信夫
(大学院 副手)

廣瀬 信夫
(大学院 副手)
宮脇 篤志
(大学院 副手)
山口 真理
(大学院 副手)

廣瀬 信夫
(大学院 副手)
山口 真理
(大学院 副手)

山口 真理
(大学院 副手)

研究経過の概要

初年度（平成5年度）

- ・本大学所蔵の音楽学資料の全容の把握
- ・そのデータベース化のための基礎作業
- ・書誌データ作成のためのフォーマットの確定
- ・音楽学資料のデータベース化作業の手順の決定及び一部試行
- ・音楽学資料保存の方法としての音源のCD化に関する研究と試行
- ・音楽学資料の補充、拡充に関する研究

第2年度（平成6年度）

- ・音楽学資料の分野別のデータベース化作業の実施
- ・そのデータベースを利用した目録（英文）作成の可能性の検討
- ・目録を利用した具体的個別的研究論文作成に向けての検討
- ・本大学所蔵の蓄音機の映像データベース及びその再生音のデータベース化作業

第3年度（平成7年度）

- ・音楽学資料のデータベース化作業の継続
- ・そのデータベースの利用可能な目録作成のための作業
- ・音楽学資料の重要な一分野である本大学の蓄音機コレクションの映像、書誌事項、再生音のCD-ROMによるデータベース化
- ・3年間の研究成果公表のための準備

研究成果について

予想をはるかに越える量の資料を扱うことになったので、資料整理のために必要な人員と時間を十分に確保することができなかつたので、当初予定した作業の50%にも満たない状態で終わらざるを得なかつた。さらにこの作業を遂行し、本大学所蔵の音楽学資料の完全なデータベース化に到達するためには、なお数年を要するものと思われる。

しかしながら、この3年間の研究の結果、この作業全体についての見通しも立ち、一部資料についてはCD-ROM作成の試みも行われた。また、データベースの基本的形態も確定することができたので、この種の共同研究としては順調に進んだものと考えられる。ただ、これでこの共同研究を打ち切つたのでは、折角の研究結果が無に帰する恐れがある。引き続き、同種

の研究により、この成果を順次拡大して行く必要がある。この研究成果の一部は、平成8年度に開催される本学の教員研究会において公表される予定である。

研究の反省

3年間の継続研究で4万点を越すSPレコードのデータベース化が到底不可能であることが明かとなった点、作業担当人員の確保、作業の性質、書誌データの確認等についての見通しが甘かったことを反省している。200点以上ある蓄音機に関しては、その映像、再生音、書誌事項等をデータベース化したCD-ROMを試作したが、蓄音機の修理、補修等を十分行い得なかったもので、やや不完全なものとなっている。この点を反省して、この蓄音機のデータベースをより精度の高いものにする可能性を探らなければならない。また、作業の過程で現在のコレクションをより価値のあるものとするための資料の補充、修理、追加についての配慮がないことが残念である。将来、本大学に大学博物館を設置しようということにでもなれば、この配慮が特に重要なものとなるであろう。

「フィールドワークにおける映像記録の方法論とそのデータ
ベースのCD-ROM化及び報告のLD化に関する研究」

研究年度・期間：平成5年度～平成7年度

平成5年度

研究代表者：馬淵卯三郎

(音楽学科 教授)

研究ディレクター：馬淵卯三郎

(音楽学科 教授)

共同研究者：川村 二郎

(文芸学科 教授)

谷村 晃

(音楽教育学科 教授)

月溪 恒子

(音楽学科 教授)

森 淳

(教養課程 教授)

山田 幸平

(文芸学科 教授)

中川 真

(京都市立芸大 音楽学科 助教授)

吉岡 敏夫

(映像学科 助教授)

志村 哲

(音楽学科 講師)

Josep Martí i Pérez

(高等学術研究会議

〈バルセロナ〉

民族音楽部 研究員)

研究補助者：池本 幸司

(大学院 副手)

石川 貴史

(大学院 副手)

田中 優子

(音楽学科 副手)

西谷 陽二

(大学院 副手)

西村美加子

(大学院 副手)

東野 眞紀

(大学院 副手)

廣瀬 信夫

(大学院 副手)

平成6年度

研究代表者：馬淵卯三郎

(音楽学科 教授)

研究ディレクター：馬淵卯三郎

(音楽学科 教授)

共同研究者：川村 二郎

(文芸学科 教授)

谷村 晃

(音楽教育学科 教授)

月溪 恒子

(音楽学科 教授)

山田 幸平

(文芸学科 教授)

森 淳

(教養課程 教授)

西岡 陽子

(文芸学科 助教授)

吉岡 敏夫

(映像学科 助教授)

志村 哲

(音楽学科 講師)

研究助言者：中川 真

(京都市立芸大 音楽学科 助教授)

松尾 容孝

(鳥取大学 教養部 助教授)

Josep Martí i Pérez

(高等学術研究会議

〈バルセロナ〉

民族音楽部 研究員)

研究補助者：池本 幸司

(大学院 副手)

西谷 陽二

(大学院 副手)

西村美加子

(大学院 副手)

東野 眞紀

(大学院 副手)

廣瀬 信夫

(大学院 副手)

平成7年度

研究代表者：馬淵卯三郎

(音楽学科 教授)

研究ディレクター：馬淵卯三郎

(音楽学科 教授)

共同研究者：川村 二郎

(文芸学科 教授)

谷村 晃

(音楽教育学科 教授)

月溪 恒子

(音楽学科 教授)

山田 幸平

(文芸学科 教授)

森 淳

(教養課程 教授)

西岡 陽子

(文芸学科 助教授)

吉岡 敏夫

(映像学科 助教授)

志村 哲

(音楽学科 講師)

研究助言者：中川 真

(京都市立芸大 音楽学科 助教授)

松尾 容孝

(鳥取大学 教養部 助教授)

研究補助者：田口 雅英

(大学院 副手)

廣瀬 信夫

(大学院 副手)

宮脇 篤史
(大学院 副手)
山口 真理
(大学院 副手)

山口 真理
(大学院 副手)

研究経過の概要

本年度は最終年次であるので、CD-ROM 作成が主要な課題である。しかし猶補助的に資料収集が必要であったので、馬淵、西岡、志村、松尾、中川などで久谷および兵庫県波賀町の他で現地調査を行った(8月後半から11月にかけて)[経費は私費支出]。映像記録資料のデータベースとしてのCD-ROM 作成は志村が学生や副手を補助者として6月末機器納入後から開始した[経費は備品購入費;作業補助は一部謝金として支払いのほかは奉仕]。データベース作成の編集ソフトとして、文字情報はマックライトⅡ、図像情報はPhotoshop、映像情報はPremiere、音響情報はSound Digidesignerを用いた。これらの諸情報を統合するソフトには、Director 4.0、ファイルメーカーProを用いた。この作成作業はかなり高度でかつ長時間を要するものであったが、久谷八幡秋祭り(およびざんごか踊り)の同時進行諸グループの進行状況をデータ化し、また尺八古管の資料をデータベース化した(月溪、志村)。これらを東洋音楽学会第四十六回全国大会(於大阪大学、95.10.1)で紹介した。発表タイトルは「マルチメディアによるフィールドワーク資料のドキュメンテーション プレゼンテーションに関する考察」。その後更に、過去に録画した四天王寺聖霊会の同時進行状況をAVデータ化した。これらのデータはHDを介して光磁気ディスクに保存し、CDに焼き付けた。

研究成果について

久谷八幡秋祭り、八雲本陣の尺八コレクションなどのデータが、動画、音響、各種文字情報の総合体として自由に検索、比較できるようになった。これは、コンピュータ関係機器及びソフト類の価格低廉化のお陰もあって、研究当初計画で期待した結果が得られたわけである。村内の異なる場所での秋祭りの同時進行状況もこれによっていわば鳥瞰的に把握できるようになったし、踊りも三方向から観察し、ラバン舞踊譜への採譜もより精密を期することができるようになった。これらは祭りをを行う地元のいわば美意識の解明に、これまでとは異なるレベルで分析できるようになったことを意味する。尺八についても、管の構造的特色と音色及び演奏技法との相対関係の分析も容易になった。その一部は上記の学会で発表されたのであるが、その際広い関心呼んだ。また聖霊会舞楽法要も、六時堂内の作法と石舞台などの屋外での儀式や舞楽の進行状況との時間的関連を初めて視覚的に同時に観察することができるようになった。この研究は身体パフォーマンス芸術への新しいアプローチを探るための方法の開発という性格のものであるので、今後この手段による芸能研究の新しい研究成果を示すことが課題である。

研究の反省

当初は素人の夢と批判されるような面もあった研究計画であったが、そして現実にLD化は経費的にまだ不可能ではあるが、このプロジェクトが承認されたお陰で、現実に新しい研究方法が開発できたことを感謝する。また、このようなデータベースのCD-ROM化の方法が確立できたので、講義用教材（楽譜と音響、図像資料など）のプレゼンテーションも教室にディスプレイ装置が設置されれば利用可能である。

「西アフリカ・ギニア湾沿岸地方の伝統工芸の研究」

研究年度・期間：平成5年度～平成7年度

平成5年度

研究代表者：森 淳
(教養課程 教授)

研究ディレクター：井関 和代
(工芸学科 助教授)

共同研究者：桜井 忠彦
(工芸学科 助教授)

下休場千秋
(環境計画学科 講師)

高畠 克己
(大学院 助手)

研究補助者：宮脇 篤志
(大学院 副手)

平成6年度

研究代表者：森 淳
(教養課程 教授)

研究ディレクター：井関 和代
(工芸学科 助教授)

共同研究者：桜井 忠彦
(工芸学科 助教授)

下休場千秋
(環境計画学科 講師)

高畠 克己
(大学院 助手)

平成7年度

研究代表者：森 淳
(教養課程 教授)

研究ディレクター：井関 和代
(工芸学科 助教授)

共同研究者：桜井 忠彦
(工芸学科 助教授)

下休場千秋
(環境計画学科 講師)

高畠 克己
(大学院 助手)

研究経過の概要

この年度をもって3年の共同研究を終えることになるので、各自の研究についてはそれぞれが以下のような研究を行った。特に研究のまとめのようなことにして、それぞれが文献資料の整理、論文にまとめて発表した者もあり、また論文にする目的で研究の整理をした者もあった。研究代表者森淳は、定年を迎える最後の年なのでアフリカ研究室に残して行く文献資料の整理を行い、特に写真等を台紙に貼り、西アフリカの調査地に分類し後任の研究者が使いやすいように整理を行った。また研究ディレクターである井関和代は、この期間に文部省の科学研究費補助を受けて、カメルーンを調査する機会もあり、これまで収集して来た資料と併せて成果を上げることができた。共同研究者の下休場千秋は学会等で研究発表を行い、成果を上げ大阪芸術大学におけるアフリカ研究を知らしめる結果となった。共同研究者の桜井忠彦は、森淳がガーナの調査時に撮影して来たアシャンテ族の鑄造に関する記録を元にして、研究を行い金属博物館での指導をえてアフリカの鑄造技術の解明を行うことができた。また高畠克己は森淳が西アフリカの調査時に採録してきた子供の歌や、音楽等の録音テープの整理をおこなった。子供の歌については森淳がビクターから依頼を受け、「小学生の音楽鑑賞」3年生と6年生の2枚のCDの一部に採用され、解説と歌の翻訳とを執筆した。

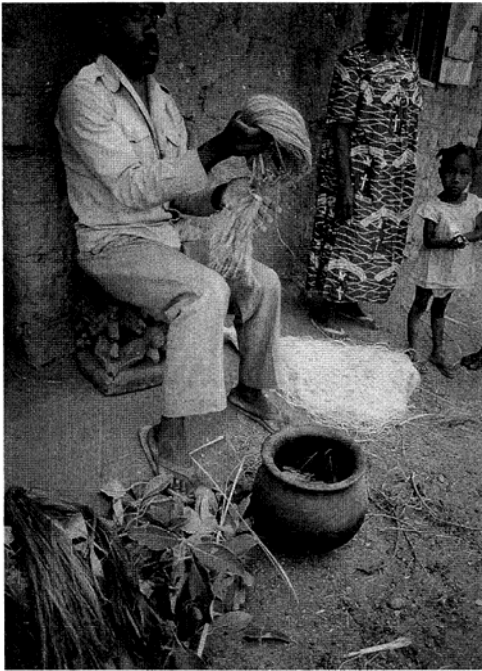
研究成果について

西アフリカ・ギニア湾沿岸地方には多くの国があり、それぞれの地方によって伝統工芸の継承の形態に違いが認められるが、この研究班としては主としてカメルーン、トーゴ、また沿岸地方とはいえないがサヘル地帯の伝統工芸の調査を行ったマリなどの諸国に目標をおき、3年の継続研究を行うことにした。この研究を通じて各自が多くの成果を見ることができた。研究代表者の森淳は、この間にアイオワ大学で行われた Clay and Fire—African Pottery in Social and Historical Context—学会に招聘され発表を行った。また中国の景德鎮で行われた 95 Jingdezhen Kaolin International Ceramic Art Conference に招聘され講演を行った。そのほかオーストラリアで発行されている Ceramics TECHNICAL 誌に “Pottery Forming Techniques in West Africa” を寄稿した。共同研究者井関和代はこれまでに収集している資料の整理をするとともに、今回は特に首長の伝統衣装の研究に主力を置き、文部省科学研究費補助を受けてカメルーンのパツツ王国の首長の衣装について研究を行い、学会で発表を行った。下休場千秋は整理した資料を元に、塚本学院海外研修制度を授与され、カメルーンの伝統的な民族芸術が近代的な物質文化の中でどのような対応に迫られているかを、環境計画の視点から研究を行いそれぞれの学会で発表を行った。桜井忠彦はガーナのアシャンテ族の金属鑄造技術について研究を行い、日本金属学会附属、金属博物館の学芸員と資料の交換を行うことが出来た。高島克巳は森淳が長年にわたって収録してきたアフリカの子供の歌、その他アフリカの音楽等の録音テープの整理を行い、地方別の分析を行った。

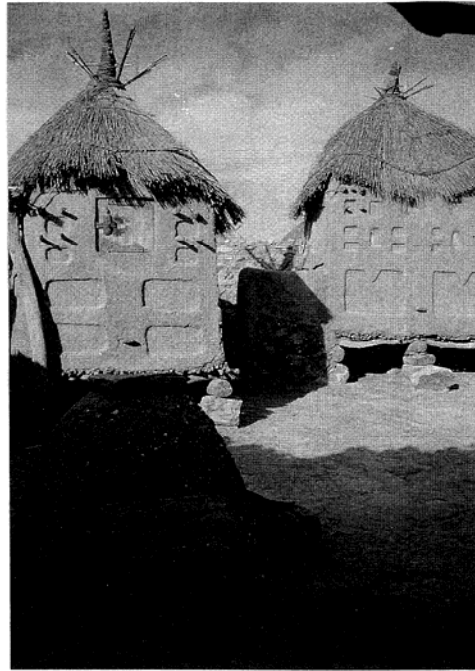
研究の反省

研究は順調に進行して来た感があるが、それぞれの研究には差異があるためチームワークがなかなか取れないきらいがあったが、結果としては研究成果の欄に述べたようにそれぞれ高い成果をあげることができた。しかし資料の保管場所に制限があり、希望としては資料を展示する場所があることが望ましいということである。今後このような共同研究を行う場合は、お互いの研究の経過を認識する必要があるのではないかと思う。また現地をまだ知らない研究者にとっては文献のみの研究にならざるを得ず、かなり苦痛を強いたきらいがあったように思われた。出来得れば共同研究者全員で現地調査が出来ることがあれば、共同研究はさらに進捗し、満足出来る結果を迎える事であろう。といっても今回の研究は研究成果についての欄に述べてあるように、高い成果を上げることが出来たことを報告したい。

(森 淳 記)



(写真1)



(写真2)

カード化を行なった資料の一部

(写真1) 井関和代撮映、「カメルーン、ティカール族のラフィア染色・黒染」

(写真2) 下休場千秋撮映、「マリ・ドゴン族の住居」

「大阪芸術大学およびその周辺の『場』の研究」 —自然科学と芸術の融合の試み—

研究年度・期間：平成6年度～平成7年度

平成6年度

研究代表者：北村 文雄

(環境計画学科 教授)

研究ディレクター：駒井 古実

(環境計画学科 講師)

共同研究者：伊藤 隆 齋部 哲夫

(工芸学科 助教授) (美術学科 助教授)

下村 孝 足立 正毅

(環境計画学科 助教授) (工芸学科 講師)

神原 哲夫 佐々田美雪

(美術学科 講師) (工芸学科 講師)

柳楽 隆一 山本善一郎

(美術学科 講師) (美術学科 講師)

平成7年度

研究代表者：北村 文雄

(環境計画学科 教授)

研究ディレクター：駒井 古実

(環境計画学科 講師)

共同研究者：伊藤 隆 齋部 哲夫

(工芸学科 助教授) (美術学科 助教授)

下村 孝 足立 正毅

(環境計画学科 助教授) (工芸学科 講師)

神原 哲夫 佐々田美雪

(美術学科 講師) (工芸学科 講師)

柳楽 隆一 山本善一郎

(美術学科 講師) (美術学科 講師)

研究経過の概要

本研究は大阪芸術大学が立地する「場」に存在する様々な物を研究対象とし、時間軸および空間軸の両面から自然科学（生物学、古生物学、生態学、地質学）的および人文科学（芸術、考古学、歴史学）的な調査研究を行ない、研究者と作家が共同調査や討論を通じての総合化（作品化）をはかることにより、芸大が立地する「場」のアイデンティティを明らかにすることを目的としていた。

本年度は以下の活動を行った。

調査：4月と5月に主として芸大の裏山や周辺地域（敏達天皇陵や石川）で植物および魚類の調査をおこなった。

講演会：11月29日に芸大周辺地域の地質の専門知識を得るために、大阪芸術大学環境計画学科非常勤務講師秋元宏氏（地形・地質学）を招き、「大阪の地質と地形」というテーマで勉強会を開催し、知識を深めた。

文献の収集：本研究テーマに関連した地質学、考古学、歴史学の論文、パンフレット、刊行物を収集した。

総合化と展示会の開催：調査により得られた資料は全員で整理（標本作成）する中で、形態や構造の観察を行い、創造活動の糧とした。研究者は得られた資料を学術的に整理し、作家は得られた資料から触発されて作品を制作した。これらの成果は、5月9日～15日に芸術情報センターで開催した「芸大の過去と現在：多様性とかたち」展（24頁写真）で公表した。

ニューズレターの発行：これまで調査した結果を芸大教職員・学生に知らせるために情報誌「東山 469—芸大周辺の博物誌」の創刊を企画し、12月初旬より数度の編集会議を開いて討議した結果に基づき、1月29日に第1号を1000部発行した。

研究成果について

以下のような研究成果を得た。

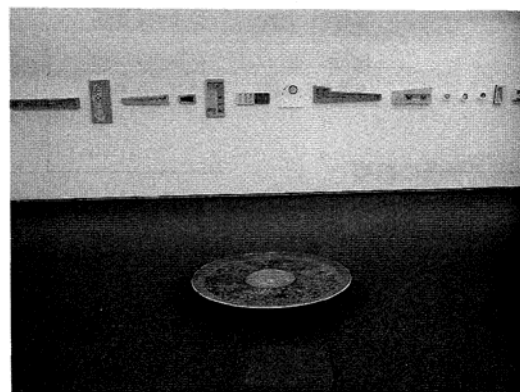
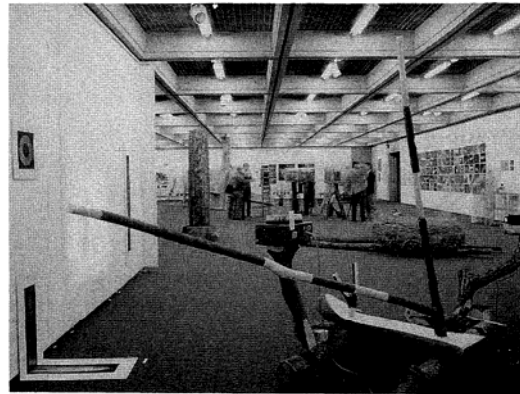
調査：《植物》4月に当時第2校区工事で開発中の丘陵地帯を中心に植物の調査を行ない、樹木の花、樹皮および草本植物の生態を写真撮影した。引き続き目録の充実につとめた。希少となったササユリ、コクランなどの生体標本を得ることができた。

《魚類》4月に石川の河南大橋付近を中心に魚類相を調査した。フナ、オイカワ、ウグイが得られたが、期待された何種かは採集できなかった。これは、昨年度の異常渇水によるものか、それとも河川の汚染など環境の変化によるものか、今後も調査を続ける必要がある。

展覧会：この展覧会の目的は、大阪芸術大学が立地する場所に空間的と時間的に存在する「もの」の調査を行い、標本の展示と解説および「もの」から触発された作品写真「芸大の過去と現在：多様性とかたち」展の展示をとおして、芸大の立地する場所は

どのような所かをそれぞれの専門の立場で表現しようとしたものである。展覧会のタイトルは「芸大の現在と過去：多様性とかたち」展とした（写真）。芸大の立地する場所を3つのキーワード：森、水、地で示される要素に分け、それぞれの要素について現在および推定される過去の状況を生物（植物、昆虫、鳥、魚）の標本（生体標本も含む）や写真、遺跡や遺物の写真、作品の展示で表現しようとした。展示標本および作品は以下の通りである：Ryuzo と刀（彫刻）、芸大の航空写真（現在と20年前）、パノラマ写真、東山遺跡の写真と地図、修羅（作品）、昆虫標本と標本箱、動植物の生態写真、植物の巨大さく葉標本（作品）、樹皮の写真、植物の生態標本、さく葉器（作品）、昆虫と鳥類の巣、Su（作品）、fossil（作品）、触・蝕（作品）、芸大池の現在と過去の魚類・水生生物相、石川の魚類、水槽（作品）、カブトエビとマミズクラゲ標本。

ニューズレター：読みものおよび研究成果の報告を主体とした8頁の冊子とし、学内および関連の機関に配布し、好評を博した。



研究の反省

5月の展覧会の準備のため、生物の調査、特に春に発生する昆虫類や野鳥の調査が十分でなかった。昨年と同様、考古学や地質学の調査が不足していた。展覧会はアンケートによるとおむね好評であったが、「解説が不足している」「展示の意図がわかりにくい」と意見もあった。今後の展覧会では展示や解説の方法について十分の検討を行いたい。

今回の作品を共同で討議しながら作りあげるということは、新しい試みであるが、必ずしもうまく機能したとは言い難い面もあった。今後この試みの可能性について検討する必要がある。

「多媒体利用における本学の教材の研究と開発」 —ブ レ ッ ソ ンの 芸 術—

研究年度・期間：平成6年度～平成7年度

平成6年度

研究代表者：長野 克亮
(放送学科 教授)

研究ディレクター：田中 敏雄
(教養課程 教授)

共同研究者：坂本登志子 高田 誠三
(放送学科 教授) (写真学科 教授)
藪 亨 豊原 正智
(教養課程 教授) (芸術計画学科 助教授)
大橋 勝 木原 俊哉
(芸術計画学科 講師) (音楽教育学科 講師)
松井 純子
(教養課程 助手)

研究助言者：田中 仁
(写真学科 非常勤講師)

研究補助者：角谷 信
(教養課程 副手)

平成7年度

研究代表者：長野 克亮
(放送学科 教授)

研究ディレクター：田中 敏雄
(教養課程 教授)

共同研究者：坂本登志子 高田 誠三
(放送学科 教授) (写真学科 教授)
藪 亨 豊原 正智
(教養課程 教授) (芸術計画学科 助教授)
大橋 勝 木原 俊哉
(芸術計画学科 講師) (音楽教育学科 講師)
松井 純子
(教養課程 助手)

研究助言者：田中 仁
(写真学科 非常勤講師)

研究補助者：角谷 信
(教養課程 副手)

研究経過の概要

本学所蔵のカルティエ＝ブレッソンの写真のコレクションを材料として、視聴覚教材の制作法とその教育効果を、制作を通じて検証することを目的に本研究を行った。その作業を行うにあたり、写真・映像・美学・放送・音楽の研究者、事務担当者、研究補助者でプロジェクトチームを編成した。まず学内で許可を得、次に庶務課を通じて、著作権をもつPPS通信にブレッソンの写真をビデオ化することの許可を求めたところ、脚本を見て検討することとなった。プロジェクトチームのメンバーで会議を重ね、ブレッソンの経歴と芸術について討論して、ビデオ化の概要を決める。小人数のチームで概要に沿った細部の脚本製作にあたり、さらにブレッソンに関する論文・写真集・展覧会等を調査研究して脚本づくりに着手する。教育目的を想定していることと、本学コレクションという限られた材料を用いるという条件から、過度に演劇的な表現は避け、ブレッソンの芸術の視点と経歴とを分かり易く紹介する構成に仕上げることで合意を得、これに沿って脚本を製作する(脚本添付)。脚本を庶務課を通してPPS通信社に提出して許可を求めたところ、今年2月に製作許可が下りる。早速ビデオ化するにあたり、作業日程の打合せの会議を開き、スケジュールを決定する。ビデオ撮影のため情報センター地下の収蔵庫より作品を搬出し、9号館スタジオに移動させ、脚本に沿って種々のアングルで収

録した。この映像をある程度編集した時点で、ナレーションを録音する作業に平行して入る。音声の収録は、放送学科のスタジオを使用して行った。次に、ナレーション入りのビデオを視聴しながら適切な曲選びを行い、一旦ナレーションとBGMの入ったビデオを作った。さらに、このビデオに編集の手直しを加え、最終的な完成品を作り上げた。

ナレーションより

大阪芸術大学にはアンリ・カルティエ・ブレッソンの写真作品コレクションが所蔵されている。大阪芸術大学の他には、ヒューストン（米国）、ビクトリア・アンド・アルバート（英国）、ビブリオテーク・ナショナル（パリ国立図書館）に収容されている世界に四セットしかない貴重なコレクションである。

写真家H・C・ブレッソン。彼の写真の特徴を表わすものとして「決定的瞬間」という言葉が用いられる。ここで言う「決定的瞬間」とは重大な出来事や事件の瞬間を指すのではない。ブレッソンの感情によって決定され、現実の一部が切り取られた瞬間のことである。写真は、言うまでもなく瞬間的なものであるが、彼はそこに写真の独自性と価値を見出しているようだ。ブレッソンの写真には一切の演出も引き伸ばしの時のトリミングもない。シャッターを切る瞬間に全てが決定されているのである。

彼はこう語っている。

「わたしにとってカメラはスケッチブックであり、直観と内発的な心の動きにしたがう道具、すなわち視覚的な言語による問いかけと決定とを同時におこなう、瞬間の支配者なのだ。世界に『意味を与える』ためには、われわれはファインダーによって切り取るものと一体にならなくてはならない。そのためには、集中力、精神の規律、感受性、造形感覚が要求される。簡素な表現に到達するためには、手段を思い切って簡素にしなければならない。

写真をとることは、一瞬のうちに消えて行く現実の表面にありとあらゆる可能性が凝集した



1 Brtssels, Belgium 1932

8 Gare St-Lazare, Paris 1932

瞬間に息をとめるということである。イメージの征服が肉体的かつ知的歓喜へと転化するのはその瞬間である」と。

ブレッソンは32年頃に35mmライカカメラと出会い、それ以来ずっとライカを使っている。彼はほとんど50ミリのレンズを使うが、50ミリのレンズは人間の視界とほぼ一致している。ブレッソンの肉眼がとらえた視野が写真の構図になるのである。

1眼レフのカメラはシャッターを切るとファインダーが遮光されるが、ライカはシャッターを切るその瞬間もファインダーで事の成り行きを確認することが出来る。

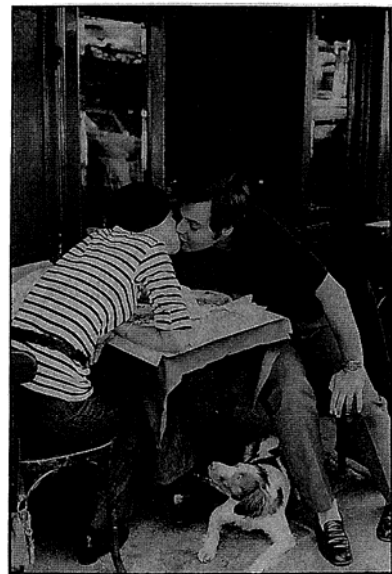
この自分の眼とカメラの眼の完全な一致が、ブレッソンの写真の特徴である。彼は、写真は撮影の際すでに全体性・完全さがなければならないと考えている。

「撮影とは認識である。事実自体と、その事実の意味をあたえる、視覚的にとらえた形態の厳密な構造とを、同時に一瞬のうちに認識することにほかならない。それは自己の知性と目と心情とを同一軸に置くことである」と、ブレッソンは語っている。

ブレッソンの写真の特徴として挙げられるものに、「二つの主題」あるいは「主題とそれをひきたてる他の要素」がある。

又、ブレッソンは写真家は受動的な傍観者ではなく、出来事に積極的に取り組まなければ、全体性・完全さをとらえることが出来ないと言っている。しかし、写真家はあくまで第三者であって、出来事の当事者では決してないことも強調している。彼の写真にはフラッシュや意図的な照明は用いられない。たとえ弱い光であっても自然光かその場の明かりを尊重しているのである。

カメラを持った人間は、へたをすると暴君としてその場に影響を与えてしまうが、ブレッソンは空気のように希薄で、それでいてものごとを隅々まで見通すことを、態度として目指しているのである。



17 Paris 1968

「中 略」

ブレッソンの写真は刻々と変化する現実の一瞬をとらえ、そこに意味をあたえている。それは事実の持つ意味であると同時にブレッソンの眼が読み取り、創り出した意味でもある。

対象に依存するのでも、利己的な創造でもない微妙なバランスの中でブレッソンは写真を撮っている。

彼は世界中の国をまわり、様々な土地の人々や生活を撮っているが、その写真は決してエキ



332 Calle Cuauhtemoczin, Mexico City 1934

169 Coronation of King George VI 1937

ゾチシズムに墮することはない。異なる風土・習慣のむこうにある人間の普遍的な姿をとらえているのである。

そこには、ブレッソンの物事の本質にせまる厳しい態度と同時に、人間に対する限りない心優しさが現れている。

研究成果について

アンリ・カルティエ＝ブレッソンは1908年にフランスで生まれ、若い頃は絵画に関心を持ち、1927～28年にかけてアンドレ・ロートに学び、シュールレアリスムの影響を受けた作品を描いていた。彼が本格的に写真の世界に入ったのは1931年頃であった。1933年にはニューヨークで初めて個展を開いた。あまり高い評価は得られなかったが、生活する人間の姿を生き生きと写したことで、識者や若い人に影響を与える。1935～39年にかけてはジャン・ルノアールのもとで映画制作にも関わっている。1936年にロバート・キャパやデーヴィッド・シーモアと知り合い、自由な写真を撮りたいという意図で意気投合する。1937年のジョージVI世の戴冠式では式そのものよりも見物に来た人々に興味をもち、レンズを見物人に集中させて、様々なアングルで撮影している。そこには、ブレッソンの芸術の視点が窺える。写真家として活躍していたが、第二次世界大戦の渦中に、ドイツ軍の捕虜となり、脱走後、対独地下組織で活躍し、フランスの解放に努める。社会・政治に関心が向き、彼の写真にも大きな影響を与える。解放後のパリで、キャパやシーモアと再会し、ニューヨークに渡り、1947年に「マグナム」という写真通信社を設立する。その後、インド・ビルマ・パキスタン・中国・インドネシア・日本等各地を訪ね、各国の人々の生活を撮っているが、その写真は決してエキゾチシズムのみにおちいることなく、人間の普遍性を捉えている。

ブレッソンは撮影にはライカを用い、彼自身の感情によって決定された“決定的瞬間”をそ

の写真の特徴とした。又、構図的には“二つの視点”という対象性を画面の中に取り入れた。以上の事柄を念頭において、脚本を作成し、ビデオ化し、作品の完成をみた。この研究の成果は、ブレッソンの芸術性の理解と、視聴覚教材のビデオ作品である。

「大阪芸術大学図書館所蔵のヴィクトリア朝時代の挿絵本と 絵入り芸術雑誌の調査研究」

研究年度・期間：平成6年度～平成8年度

平成6年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：藪 亨
(教養課程 教授)

共同研究者：高橋 亨
(美術学科 教授)
田中 敏雄
(教養課程 教授)
山崎 苺子
(文芸学科 教授)
福本 繁樹
(工芸学科 助教授)
山形 政昭
(建築学科 助教授)
笹谷 純雄
(文芸学科 講師)
水島ヒロミ
(文芸学科 講師)
木村 和実
(大学院 助手)
研究補助者：東野 眞紀
(大学院 副手)
山口 真理
(大学院 副手)

平成7年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：藪 亨
(教養課程 教授)

共同研究者：高橋 亨
(美術学科 教授)
田中 敏雄
(教養課程 教授)
山崎 苺子
(文芸学科 教授)
福本 繁樹
(工芸学科 助教授)
山形 政昭
(建築学科 助教授)
笹谷 純雄
(文芸学科 講師)
水島ヒロミ
(文芸学科 講師)
木村 和実
(大学院 助手)
田之頭一知
(大学院 助手)
研究助言者：多田 稔
(大谷大学 文学部 教授)

平成8年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：藪 亨
(教養課程 教授)

共同研究者：高橋 亨
(美術学科 教授)
田中 敏雄
(教養課程 教授)
山崎 苺子
(文芸学科 教授)
福本 繁樹
(工芸学科 助教授)
山形 政昭
(建築学科 助教授)
水島ヒロミ
(文芸学科 助教授)
笹谷 純雄
(文芸学科 講師)
木村 和実
(大学院 助手)
田之頭一知
(大学院 助手)
研究助言者：多田 稔
(大谷大学 文学部 教授)

研究経過の概要

前世紀英国のヴィクトリア朝時代には、多様で秀逸な挿絵本や絵入り芸術雑誌がつぎつぎと現れ、近代的な視覚伝達文化の推進力のひとつとなった。そして今日では、これらの書物や雑誌合本は、ヴィクトリア朝時代の芸術文化の総合的な研究にとって欠かすことのできない貴重な史料となっている。幸い本学図書館には、書物芸術再興の口火を切ったケルムスコット・プレス (Kelmscott Press, 1891-1898) 刊本、アール・ヌーヴォーの先駆けをなしたオーブリー・ビアズリー (Aubrey Beardsley, 1872-98) やウォルター・クレイン (Walter Crane, 1845-1915) の挿絵入り本、最も権威のあった総合芸術誌のひとつ『アート・ジャーナル (Art

Journal, 1839-1912)』、当代の大衆文化の息吹を今に伝える絵入週刊誌『パンチ (Punch, 1841-1992)』、そして万国博覧会の図録集など、ヴィクトリア朝時代の挿絵本と芸術雑誌の代表的なもののいくつかが収集され所蔵されている。そこで、本研究は、本学の美術史・工芸史・建築史の専門研究者たちが定期的に集まり、当資料を総合的に調査し、また本研究に関連する基本的な図書資料を収集した。

最終年次は、これまでの研究成果を基にして、本研究の対象となった図書資料の特別展を『ヴィクトリア朝挿絵本とウィリアム・モリス』(1996年11月6日-10日、大阪芸術大学情報センター・展示ホール)と題して大阪芸術大学図書館と協同で企画し開催した。またこの展覧会カタログに、本研究に関する図書資料の書誌および研究成果を集成した。

研究成果について

本研究は、3年間にわたっており、当研究に必要な図書資料を購入し、定期的に研究会を持つとともに、大阪芸術大学図書館と協同して、本調査研究の対象となった図書資料を、元エマリー・ウォーカー所蔵『ケルムスコット・ハウス写真集』をも含めて特別展観した。またその展覧会カタログを制作し、本研究に関する図書資料の書誌および研究成果を集成し公表した。

その結果、本学所蔵のヴィクトリア朝時代の絵入芸術雑誌や挿絵本は、近代的芸術文化の実相を知る上で貴重な研究史料であることを確認した。すなわち、十九世紀中葉の英国では、近代的な視覚伝達文化の幕開けを告げるかのように、『アート・ジャーナル』や『パンチ』など多彩な絵入り雑誌が相次いで創刊されている。またこうした絵入り雑誌の発達を大いに刺激したのは、第一回ロンドン万国博覧会(1851年)の時に刊行された各種の『万国博覧会図録』であり、これらは当代の産業美術のデザイン動向を今に生き生きと伝えている。その一方では、一群の秀逸な挿絵本が相次いで現れている。その口火を切ったのはモクソン版『テニスン詩集』であり、これにはラファエル前派運動の指導的な画家たちの挿絵作品が収録されている。彼らの魅力的な作品群はヴィクトリア朝の挿絵芸術に新風を吹き込んだのである。またラファエル前派の画家たちと交流のあったウィリアム・モリスは、晩年に自ら私書版印刷所ケルムスコット・プレスを設立し、書物芸術の再興に立ち上がっている。

本研究は、これら図書史料を比較研究することによってヴィクトリア朝時代の視覚伝達文化についての総合的研究を推進し、近代的な視覚伝達文化の生い立ちと書物芸術の再興の相関関係を明らかにした。

研究の反省

美しい書物再興へのモリスの熱意と優れた成果に誘われるかのように、世紀末には絵入り雑誌やプライヴェート・プレスの黄金時代が到来している。モリスのケルムスコット・プレスから直接に影響を受けたバーミンガムの『クエスト (1894-96)』、アール・ヌーヴォーの鬼才ピアズリーが挿絵画家・装丁家として活躍した『イエロー・ブック (1894-97)』や『サヴォイ

(1896)』、さらにはドイツにおけるユーゲントシュティールの温床ともなった愛書家者向けの総合芸術雑誌『パン (1895-1900)』など、多彩で華やかな雑誌が相次いで発行されている。こうした多彩なヴィクトリア朝時代における挿絵入り本や絵入芸術雑誌を取り巻く芸術的社会的な特殊性や、その今日的な意味について、共同研究者が共通の理解を得て、資料を調査研究を進めるには予想以上の調整作業を要した。しかも、今回の調査対象となっている史料はヴィクトリア朝時代 (1837-1901) の全体を貫いており、これら資料の量に圧倒されがちであった。したがって個別的な資料のさらに精細な調査研究については今後とも継続して行きたい。

「音楽運動療法理論の実践と応用」
ーパーキンソン病患者及び痴呆症患者、老人病への応用実践ー

研究年度・期間：平成6年度～平成8年度

平成6年度

研究代表者：山田 幸平
(文芸学科 教授)

研究ディレクター：野田 療
(芸術計画学科 助教授)

共同研究者：七ツ矢博資
(音楽学科 教授)
吉仲 正直
(芸術計画学科 教授)
上原 和夫
(音楽工芸学科 助教授)

研究助言者：前田 行雄
(兵庫医科大学 脳神経外科 教授)
水野 美邦
(順天堂大学 脳神経内科 教授)
養老 孟司
(東京大学 解剖学 教授)
紙屋 克子
(札幌麻生脳神経外科 看護部 部長)

研究補助者：頼田すず子
(芦屋市立浜岡小学校 みどり学級 教諭)
中川 修明
(芸術計画学科 副手)

平成7年度

研究代表者：山田 幸平
(文芸学科 教授)

研究ディレクター：野田 療
(芸術計画学科 助教授)

共同研究者：七ツ矢博資
(音楽学科 教授)
吉仲 正直
(芸術計画学科 教授)
上原 和夫
(音楽工芸学科 助教授)

研究助言者：芹澤 秀近
(芸術計画学科 講師)
水野 美邦
(順天堂大学 医学部 教授)
養老 孟司
(東京大学 医学部 教授)
立花 久大
(兵庫医科大学 医学部 助教授)

研究補助者：前田 行雄
(兵庫医科大学 医学部 講師)
紙屋 克子
(札幌麻生脳神経外科 看護部 部長)

研究補助者：頼田すず子
(芦屋市立浜岡小学校 みどり学級 教諭)
西川 恵理
(ヤマハ音楽教室 YMS 講師)
島袋 直美
(ヤマハポピュラースクール YMS 講師)

平成8年度

研究代表者：山田 幸平
(文芸学科 教授)

研究ディレクター：野田 療
(芸術計画学科 助教授)

共同研究者：七ツ矢博資
(音楽学科 教授)
吉仲 正直
(芸術計画学科 教授)
上原 和夫
(音楽工芸学科 助教授)

研究助言者：芹澤 秀近
(芸術計画学科 講師)
紙屋 克子
(筑波大学 医科学研究科 教授)
水野 美邦
(順天堂大学 医学部 教授)
養老 孟司
(元 東京大学 医学部 教授)

研究補助者：立花 久大
(兵庫医科大学 医学部 助教授)
前田 行雄
(兵庫医科大学 医学部 講師)

川島みどり
(医療法人健和会 臨床看護学研究所 所長)
鈴木 篤
(医療法人健和会 柳原病院 院長)

研究補助者：頼田すず子
(芦屋市立浜岡小学校 みどり学級 教諭)
柳生 敏子
(甲南病院 看護部 部長)
島袋 直美
(芸術計画学科 副手)
西川 恵理
(芸術計画学科 研究生)

研究経過の概要

本研究は東京足立区の柳原病院の協力のもと、健和会臨床看護研究所長川島みどり及び病院長鈴木篤以下神経内科医、看護部と大阪芸術大学からのスタッフ（野田療、ピアノ岩高直美、ビデオ録画西川恵理3名）が5月から8月まで毎週一回、一人20分、合計12回を対象患者5名に実施した。

患者選定にあたっては、柳原病院の神経内科受療中のパーキンソン病患者の中から、今までの実例を示すビデオ上映と口答説明により、音楽運動療法のアプローチについて予備知識を得た患者の中から、研究への協力を承諾した患者5名そして水頭症、小脳変性症、多発性硬化症意識障害、ミオクロヌス患者が療法を受けた。毎週一回行われるプログラムは個別の事前評価から当院のセッション並びに事後評価まで1名につき約20分の内容である。その間のデータとチームメンバー（音楽療法家、看護婦、記録係）による評価会議と記録ビデオフィルムの再生、各事例ごとに生活行動の側面と患者自身の精神、心理面の変化にフォーカスして分析記述する。あわせて、神経内科医の評価も参考にした。対象とした患者は在宅のパーキンソン病患者で高齢である為、パーキンソン病の状態だけでなく、さまざまな病歴を経て、他の疾患を合わせ持つ場合が殆どである。痴呆、アルツハイマー、等はもちろん、糖尿病、喘息、がんも併発していた者もいた。そうした患者を対象にした療法の展開は学術的意味からのパーキンソン病そのものだけについての研究にはなりえず、老人病及び人間が何を生きがいとして生きてゆくのかを考えずには進められなかった。

研究成果について

在宅のパーキンソン病患者の場合、神経内科への月1回レベルの受診により、対症的な薬物治療が中心で数種類以上の服薬をしている。しかし、その薬によって副作用が強く、幻覚、幻聴があり、患者の不安をつのらせる。家族にとってもそれらの言動に際し何の手だてもなく、いきおい寝たきりにしておく事で安心したりする。この状態を続けることがますます運動機能を低下させ、まったく生きる意欲や力さえも失っていくこととなる。このような患者に音楽運動療法を実施すると患者は新たな人間の出会いと新しい空間で楽しい時間を過ごすことになり、閉差的な状況から脱し、音楽に合わせてのトランポリンによる運動が機能の改善、回復に役立った。この活動によって身体だけでなく、心を癒し、リラクゼーションのひとつときをも創り出し、人間関係が良く保てるようになった。例えばO夫人（72才）は、本療法に参加する前は、1日の大半を寝たきりで過ごしていた。かつて大腿骨骨折の既往を持つため、主たる介護者の夫（75才）は危険を避ける意味から彼女を起こそうとはしなかった。療法に対しても当初から義理で通うような態度がみられた。ところが、夫の介添えで車椅子で来院していた夫人の変化は目覚ましく、開始2~3週間目で両手を振って玄関まで歩き、スタッフを驚かせた。現在は、表情もはっきりとし、伏し目がちの目がぱっちりとして、声を上げて笑い、行動範囲がさらに広がっている。現在夫人の目標は、1人で買い物に行き調理することである。O夫人の場合、

神経内科医の評価でも開始前と1月後では、進歩の様子が評価された。これらの成果を示す記録ビデオは福井医科大学で開かれた第15回日本蘇生学会や本学教員研究発表会、大阪芸術大学紀要にも発表している。

研究の反省

当初、予定していた生体検査や自律神経系の活動等の有無を調べる方法は、経費と労力、そしてなによりもそれらのデータが科学的に療法の効果を示すものか否かが判明していない現状では証明できない。まして、血液検査にしても医師の指示がなければ採血できず、院長の許可があっても各医師の患者への権限を無視してまでは科学的データをとることはできない。今後、その方式を選ぶ場合は主治医自身が積極的に参加し、検査費用を準備し、デリケートな数値変動も調制しつつ、その分野の専門家の協力を得なければならない。この方法を行えるのは相当な研究所、機関との共同研究が必要であり、新たな生化学的検査研究を実施する意義とその必要性を示さなければならない。それによってはじめてこの療法の有効性を科学的に証明されると思う。しかし、ここで考えておかなければならないことがある。それらのデータが人間の状態を全て示すものとは限らない事、日常の生活行動の拡大やQOLの質を高めることが、人間として生き生きと生きてゆくエネルギーであり、人と人が関り合う事による。精神的、心理的、そして身体的活性化を日常生活の中での変化と多数の変数ぐるみで評価する方法も忘れてはならない。

「映像学研究(1)」
—映画における歴史性と地域性—

研究年度・期間：平成7年度～平成8年度

平成7年度

研究代表者：山田 幸平
(文芸学科 教授)

研究ディレクター：豊原 正智
(芸術学部 助教授)

共同研究者：重政 隆文 武谷なおみ
(芸術学部 助教授) (芸術学部 助教授)
山田 兼士 吉岡 敏夫
(芸術学部 助教授) (芸術学部 助教授)

研究助言者：上倉 庸敬
(大阪大学 文学部 助教授)

研究補助者：池本 幸司
(大学院 副手)

平成8年度

研究代表者：山田 幸平
(文芸学科 教授)

研究ディレクター：豊原 正智
(芸術学部 助教授)

共同研究者：重政 隆文 武谷なおみ
(芸術学部 助教授) (芸術学部 助教授)
山田 兼士 吉岡 敏夫
(芸術学部 助教授) (芸術学部 助教授)

研究助言者：上倉 庸敬
(大阪大学 文学部 助教授)

研究補助者：池本 幸司
(大学院 副手)

研究経過の概要

本年度は2カ年研究計画の最終年度として研究成果のまとめの年であるが、前年度収集された文献及び作品の分析・整理を行いつつ、各分担領域での補足的な文献及び作品の収集が行われた。昨年度に引き続き日本映画史及び日本映画の監督に関する文献(いずれも佐藤忠男著)、資料的な文献として日本映画の男優・女優の人名事典、また日本映画に関する批評等の文献が収集された。フランス映画に関しては、「カイエ・デュ・シネマ」の英語版、また、ジャン・コクトーに関する文献などが収集された。昨年度は作品の収集がほとんどできなかったが、今回旅費も計上され、意識的に作品収集が行われた。福岡市総合図書館での作品資料の調査及び東京でのイタリア映画関係の調査研究である。特にイタリアのネオ・リアリズム関係の作品(ロッセリーニ、デ・シーカ、フェリーニ)、またピランデッロの戯曲集が8巻集められた。さらにはフランスのヌーヴェル・ヴァーグやハリウッドの作品等である。

各研究分担者はそれぞれの領域で、収集された文献及び作品の分析・整理をおこない、問題点を整理し研究会(5、6、7、8月)に臨んだ。10、11、1月の研究会では特に日本映画に関して研究助言者も交えて報告検討が行われた。そこでは、収集された東映のスクリプター、田中美佐江氏担当分の昭和22年から平成2年までの約190本、40人の監督作品のリストについて検討され、また代表的な作品について氏にインタビューを行った。さらに京都府京都文化博物館所蔵の日本映画についても調査研究および作品の鑑賞を行った。また同博物館で催された

「ニッポン・シネマ・クラシック」展（1997. 1. 11-2. 8）に於ける大正末から昭和初期に至る貴重な作品を鑑賞することができた。

研究成果について

本研究の目的は映画学体系化の試みとして次の2つの次元から多様な映画の統一的把握を行うことであった。すなわち、1) 時間的縦軸としての歴史性、2) 空間的横軸としての地域性、である。

先ず1) に関しては改めてG. サドゥールの文献を中心に、初期サイレント映画（第2次大戦前まで、前年度）以降の歴史について、特にアメリカ映画の台頭と商業的映画あるいは映画産業の成立の過程が明らかにされた。それは、20世紀初頭において既に全米で5000館が設立されていた映画館の展開とD. W. グリフィスによる『国民の創生』（1915）の成功以後設立される映画制作会社（グリフィス、アドルフ・ズーカーらのパラマウント社やチャップリンらのユナイテッド・アーティスツ社など）の発展、そしてそこからのスターの誕生による。

一方、ヨーロッパではロシア革命以後のソ連映画の展開がたどられた。さらに1930年代のフランス映画の巨匠達の動きが改めて検証されるが、やはりアメリカ映画に対抗するヨーロッパの映画史は戦後イタリアのネオ・リアリズム及びフランスのヌーヴェル・ヴァーグである。この二つの戦後の動きについてはその性格からむしろ個別の作家の側からの分担研究が行われ、ヴィスコンティ論、ロッセリーニ論、ゴダール論としてまとめられつつある。それに関連してジャン・コクトーの映像論も議論され、映像のモチーフ、映画詩としての方法等について、分担者による一定のまとめがおこなわれた。

2) の地域性の問題は上にあるように作家論との関係で一部議論がまとめられた。日本映画に関しては、撮影所システム、スターシステム、映画会社の興隆の歴史、時代劇映画の問題、さらには戦後日本映画の世界的な評価などについて部分的に検討されたが、総合的なまとめには至っていない。日本映画については別に切り離れた研究態勢が必要である。

以上の研究成果の一部については、第22回教員研究会（平成10年1月16日）において、研究者全員によるシンポジウムという形で発表された。

研究の反省

歴史性と地域性という時間軸と空間軸を映画学研究に適用したが、比較的安定して資料収集と研究が可能であったのは時間軸としての歴史性であった。これはある程度当初から予想されていたが、困難であったのは、空間性とからむ歴史性である。つまり歴史的展開における他の国の映画史の影響については必ずしも十分な文献が集められなかった。また空間軸としての地域性は、作家論と密接に関連しており、研究分担者はある意味でその方面の専門家であり、その点では一定の成果があったのではないか。しかしここでも重要なことは作品の中に地域性がどのように具体的に映像化されているのかを見いだすことであるが、そのことは同時に他の地

域性との比較検討をおのずから伴い、ここにも難しい問題をはらむことになった。今後の課題である。

既に述べたように、日本映画に関しては、あまりに身近であり、資料が豊かであり、さらに具体的な問題が数多くあるという点で、その課題毎に研究テーマを設定し、日本映画の総体的研究を改めて行う必要を感じた。

当初予定していた包括的な問題の発掘とそれらに対する一定の解決は必ずしも達成されなかった。また予算の都合上成果を形にして出せないが、改めて研究態勢を整えてこの映画学研究を続けることにしたい。

「民俗芸能伝承の構造」

研究年度・期間：平成8年度

研究代表者：馬淵卯三郎

(音楽学科 教授)

研究ディレクター：馬淵卯三郎

(音楽学科 教授)

共同研究者：谷村 晃

(音楽教育学科 教授)

月溪 恒子

(音楽学科 教授)

西岡 陽子

(文芸学科 助教授)

志村 哲

(音楽学科 講師)

研究助言者：中川 真

(京都芸大 音楽学科 助教授)

松尾 容孝

(鳥取大 農学部 助教授)

志村 哲男

(音楽学科 非常勤講師)

研究経過の概要

- [現地調査] ① 8. 30-31 三原郡南淡町阿万風流踊調査 (馬淵、東谷)
② 9. 7-8 南淡町阿万踊講調査 (馬淵、鶴見)
③ 9. 14-15 南淡阿万亀岡八幡宮秋季大祭調査 (馬淵、水落)
④ 9. 14 美方郡浜坂町久谷八幡秋祭 (鶴見、小松)
⑤ 10. 6 氷上郡氷上町谷村新発意踊調査 (馬淵、鶴見)
⑥ 10. 9-10 青垣町ざんざか踊について岡本丈夫氏 (在柏原) 及び氷上町伊
尼イチノミヤ神社秋祭調査 (馬淵、松尾、小原、矢部、鶴見、
水落、沢田)
⑦ 11. 23 三田市駒字佐八幡秋祭 (百石踊) 調査 (鶴見)

[資料整理] 太鼓踊関係の採譜資料のPC入力 (Overture)、歌詞データ入力など

[総括] 報告書公刊 (アカデミア・ミュージックと交渉中) の為の打ち合わせは、特に会合することはせず、随時FAX、電話等で行った。聞き取り結果等はデータベースとしてZIP乃至はCD-ROMの形で公刊することで合意。Dr. Martí i Pérez (ISCS/Barcelona) 寄稿分は入稿済み。

研究成果について

民俗芸能の伝承状況は土地毎に異なるが、伝承を継続させる力は地域の精神構造である。或は過疎で弱年人口が減少し、地域コミュニティの存続に危機感を持つ地域もあれば、農村が新興住宅地を含み込み、その意味で外来人口の増加が土着民に本来の地域コミュニティの変質を危惧させる地域もある。もちろん民俗慣習の維持に必要な古典的条件即ち交通不便の僻陬の地もある。民俗伝承を積極的に維持して行こうとする地域はすべて、道路及びクルマ事情こそ都

会以上だが、明らかに共通するのは、都市の消費文化から縁遠く、かつ新幹線計画から完全に見放されているということである。いわばこの都市から、現代性から疎外されているというこの意識こそが、「古来の慣習」と意識するものの喪失をそのまま地域コミュニティの喪失と等置させているものである。この共同体が危機にあるという意識が現象的化したものこそ、地域住民全体を含み込んだ身体パフォーマンスであった。しかし、意識が伝統を支えるという構造は、伝承芸能を常に時代の変化に対応させ変化展開させてゆくものである。即ち、伝承とはその個々具体的な内容に関わるのではなく、身体パフォーマンスを主体とする地域イベントの持続ということであった。(本年秋を目途に久谷を始めとする兵庫県下の太鼓踊の報告書を公刊すべく準備中であるが、其の一章としてこの伝承の構造を論じる。)

研究の反省

今回の研究計画実施上最も困難を感じたのは、研究調査に参加しようとする意欲と好奇心を持つ院生に乏しいという事であった。

「大阪芸術大学音楽学資料のデータベース化と、 その公開利用に関する研究」

研究年度・期間：平成8年度～平成9年度

平成8年度

研究代表者：谷村 晃
(音楽教育学科 教授)

研究ディレクター：谷村 晃
(音楽教育学科 教授)

共同研究者：月溪 恒子 馬淵卯三郎
(音楽学科 教授) (音楽学科 教授)
樋口 光治 前川 陽郁
(音楽教育学科 助教授) (音楽教育学科 助教授)
木原 俊哉 志村 哲
(音楽教育学科 講師) (音楽学科 講師)
芹澤 秀近 高島 克己
(芸術計画学科 講師) (音楽教育学科 講師)
中川 暎量
(舞台芸術学科 講師)

研究助言者：加藤 由紀
(音楽学科 非常勤講師)

研究補助者：西村 佳代 西村美加子
(大学院 副手) (大学院 副手)
畑野 有里 松村 郁子
(大学院 副手) (大学院 副手)

平成9年度

研究代表者：谷村 晃
(音楽教育学科 教授)

研究ディレクター：谷村 晃
(音楽教育学科 教授)

共同研究者：月溪 恒子 馬淵卯三郎
(音楽学科 教授) (音楽学科 教授)
樋口 光治 前川 陽郁
(音楽教育学科 助教授) (音楽教育学科 助教授)
木原 俊哉 志村 哲
(音楽教育学科 講師) (音楽学科 講師)
芹澤 秀近 高島 克己
(芸術計画学科 講師) (音楽教育学科 講師)
中川 暎量
(舞台芸術学科 講師)

研究助言者：加藤 由紀
(音楽学科 非常勤講師)

研究補助者：西村 佳代 西村美加子
(大学院 副手) (大学院 副手)
畑野 有里 浜淵 真弓
(大学院 副手) (大学院 副手)
松村 郁子 宮脇 篤志
(大学院 副手) (大学院 副手)
登り山美穂子 野村さや香
(大学院 副手) (大学院 副手)

研究経過の概要

平成5年度から3年継続で研究してきた「大阪芸術大学音楽学資料のデータベース化に関する研究」は、平成8年3月末日をもって一応完了した。その成果の一部は、平成8年12月13日開催の第16回教員研究会（大阪芸術大学芸術研究所主催）において公表された。既に当初より予想されたことではあるが、大阪芸術大学が保有する音楽学資料（SPレコード、ろう管、蓄音機その他）があまりにも大量であるため、与えられた時間と予算の中では到底所期の目的を達成することができなかった。

平成8～9年度は、過去3年間の研究を継承発展させ、本学の音楽学資料の公開利用の道を探る予定であったが、諸般の事情から十分な予算とそれに必要な人員を確保できなかったため、結果的には研究はほとんど進展を見なかった。

研究成果について

当初の目的である「本学所蔵の音楽学資料の全容の把握」、「音楽学資料の分野別のデータベース化作業」、「完成したデータベースに基づく内容別目録（英文）の作成」については、ひとつのモデルとして、蓄音機に関するデータベースを基に本学所蔵の蓄音機についてのCD-ROMを作成したのが唯一の具体的な研究成果である。

なお、共同研究のメンバー相互の意見交換を通して、今後の研究体制についていろいろな問題が指摘された。

研究の反省

この大量情報を処理するには、芸術研究所の共同研究の範囲を越えていることが改めて認識された。特に予算面でも、人員確保の面でも問題がありすぎる。大学がこの音楽学資料のデータベース化と目録作成及び情報発信に意義を認めるならば、学校をあげての取組みと、10年～20年の計画を立てて、地道に取り組まねばならないことが、確認された。

さらにこれだけのコレクションを真に活かすためには、コレクションの補充、修理、保管体制を確立し、できるだけ早期に次の研究体制にはいる必要がある。特に蓄音機等の機器類は今直ぐにでも補修にかからないと、恐らくもはや修復不可能になり、学校の貴重な財産が消滅しかねない。

「西洋中世・古代の建築・庭園・都市環境に見る 尺度構成理念に関する調査研究」

研究年度・期間：平成8年度～平成9年度

平成8年度

研究代表者：藤本 康雄
(建築学科 教授)

研究ディレクター：藤本 康雄
(建築学科 教授)

共同研究者：田端 修 樋口 文彦
(建築学科 教授) (建築学科 教授)

研究補助者：小林 正子
(京都工芸繊維大学大学院 博士後期課程)

平成9年度

研究代表者：藤本 康雄
(建築学科 教授)

研究ディレクター：藤本 康雄
(建築学科 教授)

共同研究者：田端 修 樋口 文彦
(建築学科 教授) (建築学科 教授)

研究補助者：小林 正子
(京都工芸繊維大学大学院 博士後期課程)

研究報告

研究経過の概要

この課題は藤本がそれまでの研究で明らかにして来た、中世各地での教会堂を主とする公共建築の造営に関し、その幾何図形的平面構成と295^m/₁₀₀前後のローマ尺関連尺度の問題を都市に布衍するものである。また同じく藤本が多年手がけて来たゴシック建築家ヴィラルール・ド・オヌクルの画帖のローマ吋格子構成に見出した、同尺度のミクロ的使用に対応して、都市というマクロな段階でのその使用の裏づけを得たいと考えたものである。それと同時に古代に引き続いて建築家が測量技師として、さらには都市計画家として、よくその職能と技量を発揮したのではないかという点を考察するもくろみも含まれる。

主な資料としてベネーヴォロの「図説都市の世界史 1-古代、同 2-中世」を用い、われわれの開発したローマ尺大モジュール格子の縮尺カラーフィルムを地図に当てて街区構成を検討した。その詳細については、大阪芸術大学紀要「藝術 21、1998」に発表済であるが、以下にその要点を抄録して成果報告とする。

1. 中世ヨーロッパの新都市の場合

中世ヨーロッパの各地では、古代ローマの遺制を伝える伝統的な都市が拡大進展を遂げる一方で、封建諸侯の軍事的要衝となる新しい都市の設営が多く見られた。これらの都市は要塞を意味してバスチッド (bastide) と呼ばれ、一般に規則正しい格子状街路によって仕切られた碁盤目状の街区平面をなし、四周を城壁で囲むものであった。

エグモルトは南フランス、ローヌ河口近くの低地帯に、1246年フランスの聖王ルイ (ルイ9世) によって、アフリカ向け十字軍の進攻拠点として築かれた。ほぼ長方形をなす城壁に固ま

れ、西北部に円形平面の天守を持つ城が置かれる。城市南側長辺壁の長さが約 500m で、 $295\frac{m}{m}$ を 1 尺とするローマ尺（以下特記ない限り単に尺とする）で換算すると約 1695、つまり 1700 尺と見なせる。また東側短辺城壁は 310m で 1050 尺と見てよい。城壁内街区は 200 尺の直角格子によく適合する。エグモルトの街の原形としては 1800 尺×1000 尺の全体が意図されたといえる。

フランス南部ペリゴール地方には、12 世紀から 14 世紀にかけてイギリス人によって建設された新城塞都市が数多く散在する。1272 年に建設されたボーモン城市の全体平面は、東西幅が約 74m で $74000/295 \approx 250$ 尺、南北長は東西壁長を平均して約 175m で $175000/295 \approx 593 \approx 600$ 尺と、それぞれ定められた公算が大である。1284 年建設のモンパジエは 700×1300 尺の長方形に納まる。ヴィルヌーヴ・シュール・ロット（図 1）は 1264 年の建設で、全体ほぼ 1000×1500 尺、中央広場はやはり 200×200 尺である。

チェコとスロヴァキアの新都市で外画寸法や街区ブロック割りと広場等には、200 尺格子の寸法適合が多く見出される。ヴォトニアンは東西・南北ともに 1200 尺の外画長を、ウニコヴは同じく 1400 尺の外画長を持つ（図 2）。ノヴィ・イチンでは、1200 尺正方形に内接する $600 \times \sqrt{2}$ 尺（ローマ矩尺）を 1 辺とする正方形に全体が納まる（図 3）。

各城市の外画城壁に一部円弧が認められる。多く 100 の倍数単位長の半径を持ち、格子上に中心を置くものとなっている。クラタウでは西北隅が 600 尺ローマ矩尺半径の円弧をなす。ヴォトニアンの西北隅は 1000 尺円弧、東南隅では 600 尺円弧の適合を見る。ウニコヴでは、全体が中央広場に中心を持つ直径 1400 尺の円弧を意図し、これに東西城壁の 1200 尺半径の円弧が想定される。

2. 古代ローマの植民都市の場合

ローマ帝国の典型的な格子状街区平面のティムガドの全体は 1000 尺×1200 尺の長方形にほぼ納まり、格子状道路により東西 11、南北 12 に区画される。街区割は 1 街区が 70 尺×80 尺で、近似正三角形を含む形を意図したと見られる（図 4）。

ヴェローナはアウグストゥスの植民都市で、アディジェ川の湾曲部に開かれ、全体は 3000 尺四方の方形に納まる。故意か任意かはたまた作図者の便宜によったか、市北端の湾曲部で外側環状路が半径 1000 尺の、内側城壁は半径 700 尺のそれぞれ円弧の部分をなし、いずれも第 7・第 VII 道路の交差点近くに中心を持つ。

ローマ帝国最北西端のブリタニアの植民都市シルチェスタでは、内部道路は格子状をなし 200 尺格子によく合致する。

ローマの格子状都市は植民農耕地の合理的分配制度としての、ケントゥリアーティオに由来すると考えられている。それは 2400 尺間隔で格子状に引かれた道路による区画、ケントゥリアを基本とするものであった。

3. 古代ギリシアの植民都市の場合

ギリシア人は版図の拡大とともに植民地域に「古い」都市と比べてより機能的・合理的な整然とした格子型都市計画を実行に移し、その格子状都市計画の発案者はヒッポダモスとされた。その代表的なものとして、前350年頃創建の小アジアのプリエネでは、全体は南北5街区、東西14街区をなして1000尺×2000尺の中に納まり、基準街区はほぼ140尺×200尺となる。

小アジアのミレトス（図5）では、北側の丘陵は旧市、南側丘陵が新市となっている。旧市全体がイオニア尺（ローマ尺）で2000尺×3000尺の中に納まる。1000尺×1000尺の大格子の中では東西に9区画、南北に11区画の割りが想定される。南側の新市では1街区寸法が北に比べて少し大きく、東西11街区と南北9街区をまとめるとほぼ正方形をなす。そしてこの正方形の一边は1000イオニア尺296mの $\sqrt{2}$ 倍、つまり1000イオニア尺（418.5m）に相当する。ここに南側の大区画街区の設営で、北側小区画街区の1000イオニア尺正方形内9×11街区構成を90°転回し、より大きい1000イオニア尺正方形内11×9街区構成としたと見られよう。街区画数の原則を保ちながら方位の変更は植民市の繁栄・富有化に伴う住宅の規模拡大による街区の拡充を、旧尺の $\sqrt{2}$ 倍という神秘性を加味した尺度で設定したのではあるまいか。

イタリア半島のギリシア植民地パエストゥムでも、200尺格子がよく合致する。全体は3000×5600尺の長方形の一部がかけた形で、幅約100尺、長さ1000尺の短冊形街区が並ぶ。

4. 中世新都市ならびに古代植民都市と建築家

住戸や公共建築におけるヒューマンスケールとしてのローマ尺つまりイオニア尺と、その派生尺の単位格子に図形を乗せる設計手法を都市にまで拡大し、そこで概念把握の容易な10尺、20尺…100尺、200尺…といった、完数単位長で街区を設定する手法を用いたと考えるのは、われわれ独自の視点といえよう。

以上、西洋中世新都市のローマ尺基準寸法格子による都市街区設計手法を、古代ローマ・ギリシアの植民都市に遡って検証し得たかと考える。それはゴシック建築家が、建築設計家、都市設計家、そして測量技師という実務家として、古代ローマのウィトルウィウスひいては古代ギリシアのピッポダモスらの伝統手法を受け継ぐ職能をこなしたことを、幾何学図法と尺度の用法から裏づけるものである。

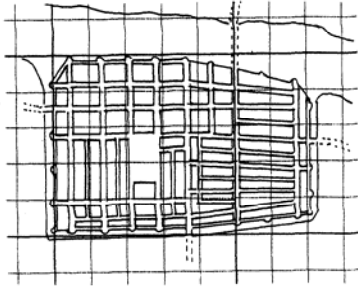


図1. ヴィルヌーヴ・シュール・ロット
(200ローマ尺格子と円弧は藤本。以下同じ。)

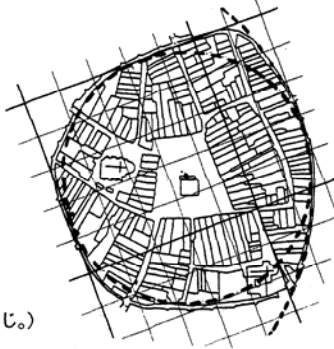


図2. ウニコヴ

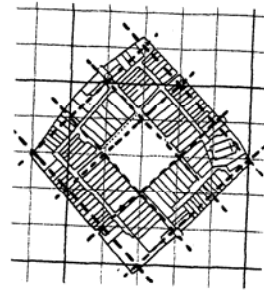


図3. ノヴィ・イチン

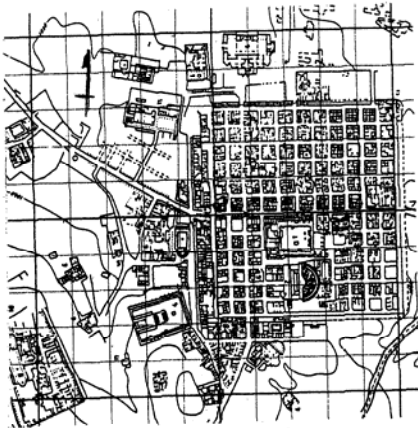
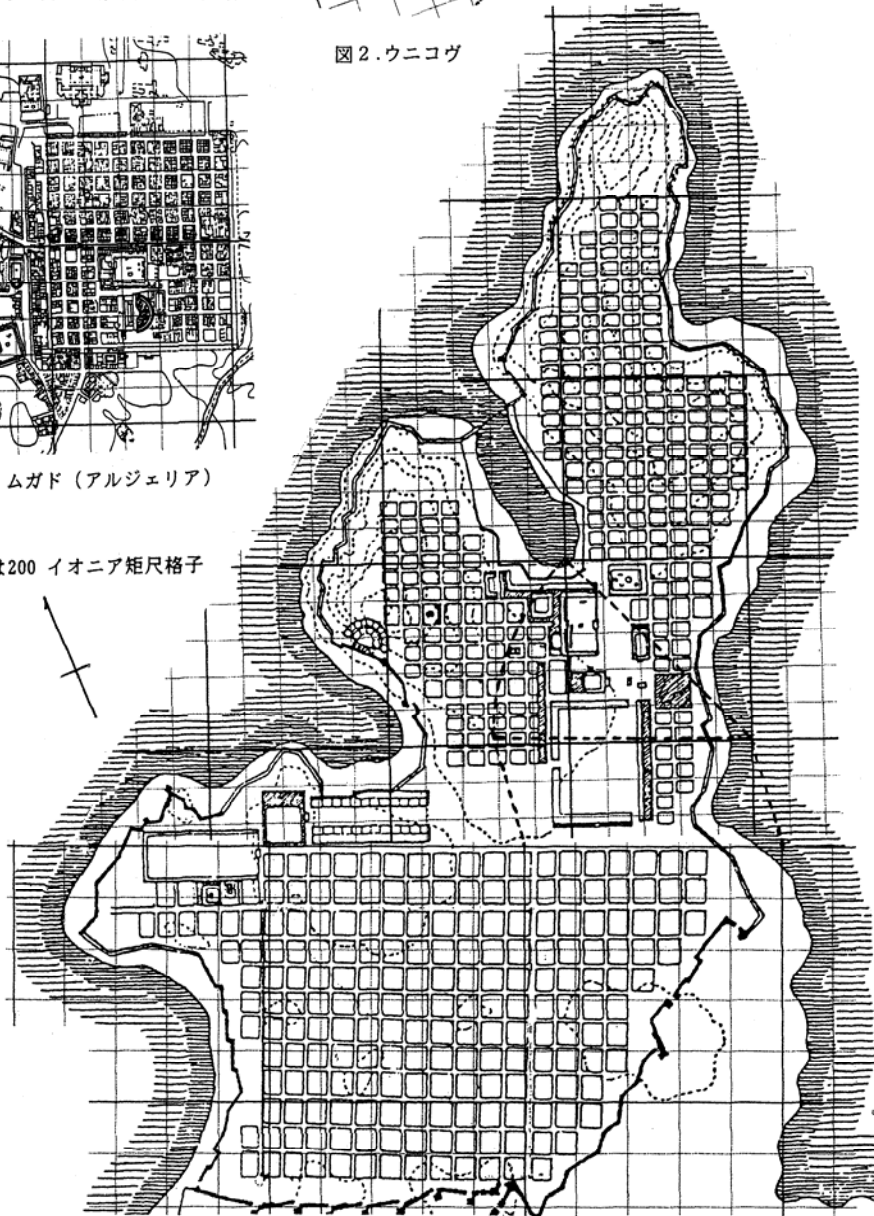


図4. ティムガド (アルジェリア)

図5. ミレトス
下方都市は200 イオニア矩尺格子



「コンピュータ・ネットワークを活用したマルチメディア 教材による教育システムの開発」

研究年度・期間：平成8年度～平成9年度

平成8年度

研究代表者：馬淵卯三郎

(音楽学科 教授)

研究ディレクター：志村 哲

(音楽学科 講師)

共同研究者：谷村 晃 月溪 恒子

(音楽教育学科 教授) (音楽学科 教授)

七ツ失博資 芹澤 尚子

(音楽学科 教授) (音楽学科 助教授)

研究助言者：鈴木 孝 森 光彦

(東京工業高等専門学校 情報工学科 助教授) (浜松職業能力開発短大 情報技術科 講師)

瀬山 徹 山田智恵子

(音楽学科 非常勤講師) (音楽教育学科 非常勤講師)

平成9年度

研究代表者：馬淵卯三郎

(音楽学科 教授)

研究ディレクター：志村 哲

(音楽学科 講師)

共同研究者：谷村 晃 月溪 恒子

(音楽教育学科 教授) (音楽学科 教授)

七ツ失博資 芹澤 尚子

(音楽学科 教授) (音楽学科 助教授)

研究助言者：鈴木 孝 森 光彦

(東京工業高等専門学校 情報工学科 助教授) (浜松職業能力開発短大 情報技術科 講師)

瀬山 徹 山田智恵子

(音楽学科 非常勤講師) (音楽教育学科 非常勤講師)

研究経過の概要

情報ネットワークの技術は、インターネットの実用化によって飛躍的な発展をとげ、かつ多くのユーザーを獲得した。また、これらの技術は、イントラネットというかたちで、大学・研究機関や企業における実務形態を変革する基盤となっている。本研究の目的である教材提示システムの開発および運用は、技術的には近い将来、これらコンピュータ・ネットワーク技術の発展した時点で応用すれば達成できるであろう。そこで、我々、芸術系の教育者は、来たるべきネットワーク社会に備え、今後作成する教材においては、ヴァーチャル・キャンパス的な在り方としての自宅学習、遠隔地における受講や資料の提示等を視野に入れたコンテンツ作りを行なうことが必要となってくる。

ところで本研究における公開を前提とした諸資料のデータ化には、現在のインターネット社会がかかえる問題と共通する、たとえば著作権や情報の管理等、解決しなければならない問題が様々に存在する。そこでまず、以下の会合に参加して情報を収集するとともに、本研究固有の問題点に関して検討した。

- 1) (社)私立大学情報教育協会主催・平成9年度情報教育問題フォーラム・情報教育方法研究発表会に参加し、「教育におけるヴァーチャル性」他の講演を聴講するとともに、分科会においては、マルチメディア教材に関しての筆者の担当する授業での取り組みについて概説し、議論に加わった。
- 2) 情報処理学会音楽情報科学研究会・夏のシンポジウム '97に参加し、音楽情報処理に関する

る最新のテクノロジーについての講演と研究発表会を聴講するとともに、様々なジャンルの研究者と情報交換、研究打ち合わせ等を行なった。

- 3) 平成9年度、本学で開催された日本音楽学会全国大会において、シンポジウム「音楽研究のためのコンピュータ技術－現状と展望－」の企画および、司会進行を行なうとともに、本研究の一部を発表した。

以上の調査研究の結果を踏まえ、本研究予算でDVカメラを購入し、教材作成のためのフィールドワークを行なった。また、ネットワーク化の実験のためのコンピュータには、実際に研究室のサーバから教室のクライアントに高速でデータ転送を行なう実験を重ねた末、最終的に本研究に有効な機種を選定し、購入した。

研究成果について

情報教育問題フォーラムにおいては、「教育におけるヴァーチャル性」に関して、主に医学分野の実例紹介とその有効性についての講演を聴講した。我々芸術分野の教育に一部応用できる面はあるものの、主体性や個性が重視され、創造性を育む教育現場には、これと異なった独自のアプローチが必要であると認識した。また、情報教育方法研究発表会においては、マルチメディア教材の活用方法に関する分科会に参加し、現在、我々が構築中の音楽資料データベースを紹介した。また、他分野のかかえる諸問題を把握できた。特に興味深かったことは、各学問領域共通の問題意識として「コンピュータを活用した教材作成には、文字情報の含まれる比率が多すぎたはいけない」ということであった。ここでも、マルチメディアの有用性が示唆されたと考えられる。

音楽情報科学研究会は、研究ディレクター・志村が私的研究会の段階からその設立者の一員として関わり、音楽分野への情報科学的アプローチの在り方について模索してきたが、現在では、情報処理学会の正式な研究部会として活動が認知され、規模も拡大した。本研究会には、大学・研究機関をはじめ音楽・情報関連企業からの参加もあり、最新のソフトウェア技術や世界の動向に関して、本研究の研究助言者および、他の会員からも有益な助言が得られた。

以上の情報を踏まえ、構築したネットワークシステムは次のようなものである。

- 1) 音楽学研究室（3-413）にマルチメディア・サーバを置き、教員は制作した教材をこのハードディスクにそれぞれインストールする。
- 2) 情報音楽演習室（2-32）には、クライアント端末に100インチのプロジェクタが接続されており、3-413のサーバから専用線で100M/bpsのデータ転送を行なう。これにより動画を駆使した教材の活用が可能となった。また、学生用の25台の端末からも、教材を参照可能である。
- 3) 各講義室においては、学内LANのコンセントが配備されたので、授業時、ノート型パーソナル・コンピュータを持参し、WWWあるいは、AppleShareの技術を介して教材の提示を行なう。

また、これらの一部を日本音楽学会大会・シンポジウムおよび、デモンストレーションを企画して紹介し、学会誌にその報告を寄稿した^(注)。

研究の反省

研究計画立案当初は、すぐにでも教材に使用する資料を選定して、これをマルチメディア化する作業を開始できると考えていたが、現実には実際の資料の取り扱いや、ネットワーク用ハードウェアとソフトウェアおよびシステム化のための技術に、多くの問題を検討しなければならないことが判明した。そこで前年度に引き続き、教材内容の検討の前にこれらの問題を解決するための調査研究を行なった。また、授業方法のモデル化とシステムの設置および、取りあえずの稼働実験を完了しなければならなかったため、さまざまなカリキュラムに対応した個別のニーズを十分に議論するにはいたらなかった。その原因としては、1) 助成申請前には3年計画で立案した研究課題を2年間に圧縮したこと、2) 学内LAN設置が具体化し、当初、個別に敷設するはずであったネットワーク工事がLANの検討スケジュールに合わせるため1年以上も遅れ、実験が早期に行なえなかったこと、3) 予算の一部カットにより開発費(謝金等)が取れず、開発期間が大幅に遅延してしまったこと、等があげられる。しかし、研究スケジュールを早期に項目毎に分割して、並列的に進行するよう調整できなかったことは、今後の反省材料となった。また、今回、マルチメディア教材提示のための雛形が完成し、実際のシステムを稼働させる実験も完了したので、今後も関係各位との意見交換の機会を得て、コンピュータを活用した授業の定着に貢献したいと考えている。

また、来年度は学内LANが本格的に稼働を始め、かつインターネットとの接続が実現されるであろうから、教室や自宅の端末を使用した授業用テキストの参照、復習やレポートの提出、教員への質問がブラウザやe-mailで行える等、ネットワークの特性を活かした教育方法の検討や、もし将来的にヴァーチャル・キャンパス構想が打ち出された場合、その一助となるような研究を継続していきたいと考えている。

(注) 「音楽研究のためのコンピュータ技術 —現状と展望—」

日本音楽学会編『音楽学』 43巻3号, pp. 197-205, (1998).

「映像基礎教育のあり方とその実践方法について」

研究年度・期間：平成8年度～平成9年度

平成8年度

研究代表者：山田 幸平
(文芸学科 教授)

研究ディレクター：遠藤 賢治
(映像学科 助教授)

共同研究者：池内 義幸 佐々木侃司
(映像学科 教授) (映像学科 教授)
鳥居 元宏 中島 貞夫
(映像学科 教授) (映像学科 教授)
森田富士郎 井本 雄三
(映像学科 教授) (映像学科 専任講師)
田中 光恵 吉川 幸夫
(映像学科 専任講師) (映像学科 専任講師)

研究助言者：赤塚 滋 荒川 輝彦
(映像学科 非常勤講師) (映像学科 非常勤講師)
井川 徳道 渡辺 貢
(映像学科 非常勤講師) (映像学科 非常勤講師)

研究補助者：浅尾 芳宣 遠藤健太郎
(映像学科 副手) (映像学科 副手)
公文 理絵 佐藤 貴雄
(映像学科 副手) (映像学科 副手)

平成9年度

研究代表者：山田 幸平
(文芸学科 教授)

研究ディレクター：遠藤 賢治
(映像学科 助教授)

共同研究者：池内 義幸 佐々木侃司
(映像学科 教授) (映像学科 教授)
鳥居 元宏 中島 貞夫
(映像学科 教授) (映像学科 教授)
森田富士郎 井本 雄三
(映像学科 教授) (映像学科 助教授)
田中 光恵 吉川 幸夫
(映像学科 専任講師) (映像学科 助教授)

研究助言者：赤塚 滋 荒川 輝彦
(映像学科 非常勤講師) (映像学科 非常勤講師)
井川 徳道 渡辺 貢
(映像学科 非常勤講師) (映像学科 非常勤講師)

研究補助者：浅尾 芳宣 遠藤健太郎
(映像学科 副手) (映像学科 副手)
公文 理絵 佐藤 貴雄
(映像学科 副手) (映像学科 副手)
中山由美子
(映像学科 副手)

研究経過の概要

1年目の研究域は、短編映画制作の企画、シナリオから撮影に至るまでの、プレプロダクション及びプロダクションの工程である。

基礎教育としての教材素材の検討、案出、制作と資料収集である。初めて16ミリフィルム機材を扱うにふさわしい、基本的作業の行える内容のシナリオを企画、案出すること。撮影準備、撮影、ラッシュプリント・チェックに至るまでの作業それぞれの諸問題を引き出し、具体的解決策を考察していく。

① 企画、シナリオ



16ミリフィルム作品「おとしもの」

学生（1回生）が撮影できることとして、舞台は大阪芸大キャンパス内であること。配役が学生でまかなえること。室内、屋外の撮影が行えること。セリフをできるだけ少なくすることなどを条件として課し、シナリオを執筆した。

② 撮影準備

シナリオをもとに香盤（撮影場所ごとにシーン、登場人物、衣装、小道具などをまとめ一覧表にしたもの）を作成し、またそれをもとに撮影日程を組んでいく。

③ 撮 影

今回、限られたスケジュールの中で消化しなければならなかったが、当時舞台芸術1回生の青山麻紀さん、中村真利亜さん、小林篤君、山本光治君、吉村祐樹君の好演のおかげでスムーズに運んだ。

④ 現 像

ラッシュ・プリント（ポジ）で技術面、演出面の問題点をチェックする。問題があれば再撮影の場合もある。

2年目の研究域は、ポストプロダクションである。ポストプロダクションとは映画（映像）撮影終了から作品完成までの数々の作業工程のことを意味する。

それぞれの作業を共同で行い、そこから生じてくる諸問題を引き出し、具体的解決策を考察していく。

① ポジフィルム編集

今回、撮影に入る前に絵コンテを準備せず、撮影現場で必要と思われるショットを撮っていく方法を取ったために、フィルムをカットする前に、画像をビデオ変換し、VTRによるオフライン編集を行った。そのデータを元に、ポジフィルムを編集した。

② オプチカル・プリント

オーバー・ラップ、コマ延ばし等、特殊な焼き付けを事前に現像所に依頼し、ネガ作成した。

③ アフレコ

オールロケや諸々の事情で、音声はほとんどアフレコとなった。セリフの他、SE（効果音）もスタジオ等で作成、収録となった。

④ MA

素材音を映像とタイミングを合わせながら再録音し、セリフ、効果音、音楽をそれぞれシネテープに仕上げる。

スクリーン・サウンド・デジタル・オーディオ編集装置を使用し、足音の効果作成や、微妙な音のバランス調整などに威力を発揮し、作業時間短縮にも貢献した。

⑤ ダビング

3本のシネテープをタイミング合わせして1本にまとめる。これが、音ネガ作成の原版になる。

⑥ ネガ編集

原版ネガ作成のために、ポジ編集のデータ通りネガ編集し、音ネガと同期させる。

⑦ 初号プリント

現像所にポジ、画ネガ、音ネガを持込み、プリント仕上げをする。

研究成果について

どの作業工程においても撮影準備同様、またはそれ以上の準備、仕込みの綿密な作業が重要であることが具体的に理解できた。

使用する機器類の十分な事前チェックが大切であり、消耗品については作業内容の熟知からの判断による準備が必要であった。

またそれはシナリオの熟読、理解、深く広い分析に基づくものであり、常にシナリオの中に解答を求めるべきであることが具体的に理解できた。

プリントを2本仕上げることにより、映像面からと音響面からの比較考察が具体的にできて有効であった。

オプチカル作業では、現像所との具体的な指示方法等、現場で見学を兼ねて学べ、また実際に仕上がってくるものを研究資料として作成できた。教材として有効である。

同様に初号プリント作業の折には（実はどの作業工程でも同様に重要だが）感性的、芸術的打ち合わせが、現像所のスタッフ（現場）と行えて、あらためて重要性を認識した。

研究を一区切りするにあたり、我々の研究は映像のリテラシー（読み書き）についてであったことを再確認でき、その重要性を痛感している。

研究の反省

- ・シナリオの読解をどのように指導すべきか
- ・撮影準備を具体的に学生各々にどのように指導できるか
- ・編集作業を具体的に学生各々にどのように指導すべきか
- ・集団作業と個別作業のスタッフ・ワークの行い方、その指導について

上記に例を挙げたような点を研究者個々には理解、判断できているものと考えているが、いまだ共通の指導法、教材の具体的な教示方法などまで研究を進められずに至った。それは各々の個性によって行えるが、共通に確認し合っておくべき基本となるテキストが必要と考えられる。

配役に当たって舞台芸術学科、堀田充規先生、研究室の副手の方々にご協力をいただきました、お礼を申し上げます。

「環境デザインにおける計画と芸術の関係に関する研究」
—大阪の風土と造形—

研究年度・期間：平成8年度～平成10年度

平成8年度

研究代表者：稲田 尚之
(芸術文化研究科 教授)

研究ディレクター：清水 正之
(環境計画学科 教授)

共同研究者：荒木 正典
(環境計画学科 教授)
ハーヴィル シャピロ
(環境計画学科 教授)
松久 喜樹
(環境計画学科 助教授)
吉原 卓男
(環境計画学科 助教授)
若生 謙二
(環境計画学科 助教授)
柿沼 祐太
(環境計画学科 講師)
篠沢 健太
(環境計画学科 講師)
下休場千秋
(環境計画学科 講師)
福原 成雄
(環境計画学科 講師)
研究補助者：勝手美千子
(環境計画学科 副手)
三原 直人
(環境計画学科 副手)
辻井喜代美
(環境計画学科 副手)

平成9年度

研究代表者：稲田 尚之
(芸術文化研究科 教授)

研究ディレクター：清水 正之
(環境計画学科 教授)

共同研究者：荒木 正典
(環境計画学科 教授)
ハーヴィル シャピロ
(環境計画学科 教授)
松久 喜樹
(環境計画学科 助教授)
吉原 卓男
(環境計画学科 助教授)
若生 謙二
(環境計画学科 助教授)
柿沼 祐太
(環境計画学科 講師)
篠沢 健太
(環境計画学科 講師)
下休場千秋
(環境計画学科 講師)
福原 成雄
(環境計画学科 講師)
研究補助者：勝手美千子
(環境計画学科 副手)
辻井喜代美
(環境計画学科 副手)

平成10年度

研究代表者：清水 正之
(環境計画学科 教授)

研究ディレクター：清水 正之
(環境計画学科 教授)

共同研究者：荒木 正典
(環境計画学科 教授)
ハーヴィル シャピロ
(環境計画学科 教授)
松久 喜樹
(環境計画学科 助教授)
吉原 卓男
(環境計画学科 教授)
若生 謙二
(環境計画学科 助教授)
柿沼 祐太
(環境計画学科 講師)
篠沢 健太
(環境計画学科 講師)
下休場千秋
(環境計画学科 講師)
福原 成雄
(環境計画学科 講師)
研究補助者：辻井喜代美
(環境計画学科 副手)

研究経過の概要

この研究の目的は、大阪における環境デザインを風土との関係からとらえ、評価を加えようとするものである。それらの評価軸を多角的にとらえるため、研究員の専門領域にもとづく3つの研究班を組織した。各研究班の視点は、A班：享楽空間（社会文化軸）、B班：都市空間と場の設定（空間軸）、C班：自然環境と都市（自然軸）であり、これらの軸をもとに、大阪

の地域特性の分析と考察を行った。

A 班：大阪における風土と造形の特性に関して、非日常的な享楽空間、とりわけ行楽の空間に焦点を絞り研究を進めた。行楽空間の魅力は何か。近世・近代において大阪の人々が自然と接する行楽空間の特性について、社会文化的背景をふまえて分析した。摂津・河内・浪速名所図絵等に含まれる名所旧跡や主要な庭園についての成立・立地条件とそれらの変遷、また近代における公園や遊園地の発展過程に関して、文献資料や現地調査にもとづく考察を行った。

B 班：大阪の都市空間と場の変遷を通して、風土とその造形の関わりについての研究を行った。研究対象地区としては、旧三郷地区及び上町台地の四天王寺・庚申堂、生玉・高津等の境界をとりあげ、その土地特性とそこで展開される人間生活の歴史的営為が、都市空間にどのような空間的影響を及ぼしたのか、古地図、文献、地形図、図版、写真画像などを通じてその変遷を考察した。

C 班：大阪の都市形成を自然史の観点からとらえるため、海からの自然環境の変化に注目した。古代から現代にいたる沖積平野の自然特性を把握するために、「デルタからみた発達史」という視点から研究を進めた。古代における自然環境の変化を大阪盆地の形成に絞り、10 万分の 1 の沖積層基底等深線図の作成を試みた。立地構造に防災上の脆さを宿命としてもつ都市の中での人間と自然の関わりについて見直し、自然史の流れの中で地域の変容をとらえた。

研究効果について

それぞれの研究班と全体の研究成果は次の通りである。

A 班：行楽空間の変遷と特性を時間軸と空間軸の上で把握した。大阪近郊の遊園地形成史を中心とする年表ならびに、摂津・河内・浪速名所図絵等に表された、公園や園庭を含む名所旧跡の分布図を作成した（図-1、表-1）。さらに、大阪地域の土地利用や地形とそれら行楽空間との対応関係を明らかにするために、景観構成要素を主とする地理情報データベースを作成した。分析の結果、自然と文化が多様性に富み、希少価値の高い環境条件を備えた場所が魅力ある行楽空間になり得ることが確認できた。

B 班：大阪の都市空間と場の変遷を、それぞれの境界の土地特性と人間生活の歴史的営為と空間的特性を通して把握し理解を深めるため、データベースの作成をおこなった。データベースは、CG を使った 3D 地形モデル化、航空写真の分析、収集した歴史文献資料の適正化、現地調査の評価、及びそれらを空間解析してモデル化した図によって構築されており、それぞれをコンピュータ上でリンクする事により詳細の把握を可能にした。

C 班：大阪の立地構造の変遷を図版と文献資料をもとに考察した。自然史の概要に関する年表を作成し、関連する図版からデルタの発達を視覚的にとらえた。古代の海面レベルの変化にみる大阪の立地条件は現代とは大きく異なる。環境変化に伴う海面上昇の可能性が指摘されているが、デルタ形成が人間の開発行為とその影響により、複雑化していった過程を明らか

にした。

これらの各班の研究成果について、時間軸と地理上のスケールを設定し、総合化したデータベースの作成を試みている。

研究の反省

平成10年度の研究課題は、今年度までになされた成果を総合化して生活空間の画像データベースを作成し、評価軸をもとに大阪の風土と造形の関わりを考察し、計画と芸術の関係についての研究をまとめることである。各班でそれぞれの視点での研究課題の分析と情報の共有化の試みは、ある程度成功したと思われるが、各班の成果を相互に討議し、評価軸を統合化することの困難さを痛感した。それは各々の視点による価値の共有化の難しさにあるともいえよう。しかし、それらは研究成果でもあるデータベースの構築のプロセスでの、具体的な成果を前にした討議により、克服されつつある。今後はデータベースをもとにした共同討議の機会を濃密に行うことが求められる。

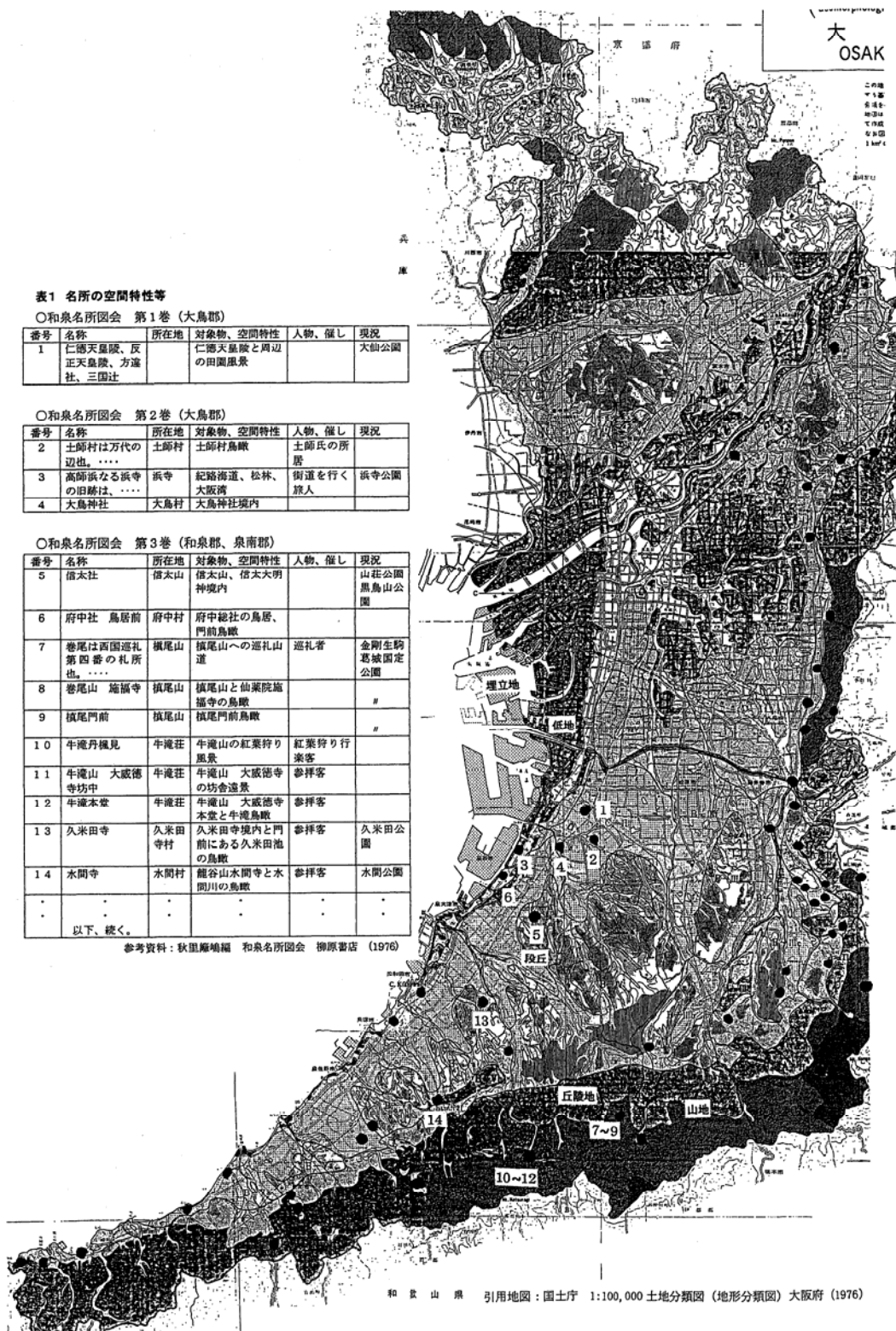


図1 特定された名所の位置 (和泉、河内名所図会より)

「身近な自然をモチーフとした環境教育と 造形教育の可能性の研究」

研究年度・期間：平成8年度～平成10年度

平成8年度

研究代表者：稲田 尚之
(環境計画学科 教授)

研究ディレクター：駒井 古実
(環境計画学科 講師)

共同研究者：伊藤 隆
(工芸学科 助教授)

北端 信彦
(デザイン学科 助教授)

齋部 哲夫
(美術学科 助教授)

佐々田美雪
(工芸学科 助教授)

下村 孝
(環境計画学科 助教授)

富里 重雄
(デザイン学科 助教授)

足立 正毅
(工芸学科 講師)

大橋 勝
(芸術計画学科 講師)

神原 哲夫
(美術学科 講師)

柳楽 隆一
(美術学科 講師)

山本善一郎
(美術学科 講師)

研究助言者：永井元一郎
(清教学園高等学校 教諭)

奥田 基之
(写真学科 非常勤講師)

平成9年度

研究代表者：稲田 尚之
(環境計画学科 教授)

研究ディレクター：駒井 古実
(環境計画学科 助教授)

共同研究者：伊藤 隆
(工芸学科 助教授)

北端 信彦
(デザイン学科 助教授)

齋部 哲夫
(美術学科 助教授)

佐々田美雪
(工芸学科 助教授)

足立 正毅
(工芸学科 講師)

池田 光恵
(映像学科 講師)

大橋 勝
(芸術計画学科 講師)

神原 哲夫
(美術学科 講師)

篠沢 健太
(環境計画学科 講師)

柳楽 隆一
(美術学科 講師)

山本善一郎
(美術学科 講師)

研究助言者：下村 孝
(京都府立大学 環境デザイン学科 教授)

奥田 基之
(写真学科 非常勤講師)

研究補助者：上野 亜希
(環境計画学科 副手)

平成10年度

研究代表者：清水 正之
(環境計画学科 教授)

研究ディレクター：駒井 古実
(環境計画学科 助教授)

共同研究者：伊藤 隆
(工芸学科 教授)

齋部 哲夫
(美術学科 教授)

佐々田美雪
(工芸学科 助教授)

池田 光恵
(映像学科 助教授)

富里 重雄
(デザイン学科 助教授)

足立 正毅
(工芸学科 講師)

大橋 勝
(芸術計画学科 講師)

神原 哲夫
(美術学科 講師)

篠沢 健太
(環境計画学科 講師)

柳楽 隆一
(美術学科 講師)

山本善一郎
(美術学科 講師)

研究助言者：下村 孝
(京都府立大学 環境デザイン学科 教授)

奥田 基之
(写真学科 非常勤講師)

研究補助者：上野 亜希
(大学院 副手)

研究経過の概要

本研究は平成6年度藝術研究所研究調査「大阪芸術大学およびその周辺の場の研究－自然科学と藝術の融合の研究－」および平成7年度藝術研究所研究調査「大阪芸術大学およびその周辺の場の研究－自然科学と藝術の融合の研究その2－」の実践のなかで生まれた問題意識を発展させたもので、大阪芸術大学およびその周辺に存在する身近な自然（動植物および古生物学、地質学から得られる資料）を用いた環境教育と造形教育の可能性を探ることを目的としており、平成8年度は継続3カ年の3年目である。本年度は以下の活動を行った。

ニュースレターの発行：「東山469」を1月に1回、「Higashiyama Newsletter」6月と7月の2回発行を行った。

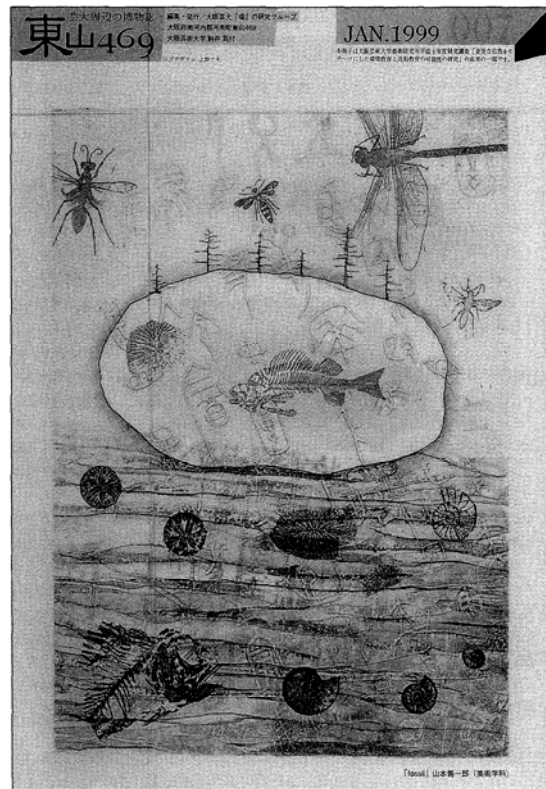
「共同研究授業」の結果の分析と方法論の検討：昨年度実施した「共同研究授業」（身近な自然に存在する自然物をもとにした造形教育と環境教育の試み。芸大裏山における自然観察、顕微鏡を使用した種子の形態と観察、レクチャーと実習を組み合わせた学科の異なる教員が共同でおこなう授業）の分析を行った。共同研究授業に必要な自然教材の収集を行った。

教材の収集の収集と自然観察会の開催：5月、7月、10月、11月、12月に芸大周辺で自然観察会をかねて動植物の調査を実施した。

研究成果について

本年度は以下のような研究成果を得た。

ニュースレター：「東山469－芸大周辺の博物誌－」（写真）は芸大周辺の自然についての調査結果の報告を中心とした8ページだての冊子で、芸大の教職員・学生、南河内の地方自治体の教育委員会、博物館と博物館相当施設に配布し好評を博した。7号の内容は以下のとおりである。7号（発行部数3000部）：表紙作品：fossile（山本善一郎）、工芸学科1回生工芸実習 金属コース報告 テーマ：種子－芸大付近の里山を中心に採



●工芸学科金属コース
一回生工芸実習
テーマ「種子」
芸大の付近の里山を中心に採集したもの



伊藤 隆 (工芸学科)

私たち大阪芸大「場」の研究グループは、“身近な自然から造形・環境教育の可能性を探る”という目的で共同研究をおこなっています。

共同研究グループのテーマである「種子」を取り上げそれを複数学科の教員が共同で造形教育の中に取り入れてみました。今回最初の試みとして、工芸学科金属工芸コースの一回生工芸実習授業を研究対象として実施しました。

■授業方法

工芸学科金属工芸コース 1 回生 工芸実習 (月) III 時限～V 時限
前期 1 2 週 担当教員 伊藤・佐々田

■課題

真鍮板を使って種子をテーマとした透かし模様を入れた葉書入れを作る

○素材

真鍮板 240mm×360mm 厚さ 1mm を使用

■制作意図

○金工の学生として必要である素材の研究、技法・技術、道具の使い方の習得

○種子というテーマを客観化して造形手法へ結びつける

○自然科学研究者のレクチャーから知識を得て、自然観察、種子採集、顕微鏡による種子観察などにより、自然への視野を広げ、関心度、理解度を深める

■授業内容及び制作行程

「種子」についてのレクチャー・自然観察や種子採取によってえられた知識をもとにして「種子」をテーマとした透かし模様を入れた葉書入れの制作にはいる

○テーマにそって機能性を持った葉書入れの形態や透かし模様をデザインする

○ケント紙、画用紙などで原寸大のエスキース制作

○厚さ 1mm の、真鍮板を素材として、糸ノコ・ヤスリ・ドリル・榫・バーナなどの、道具を使って、材料に穴あけ・切り・折曲げ・削り・接合し・叩き・磨く、これらの技法によって、葉書入れという、作品を制作する

○葉書入れの作品合評

■レクチャー・自然観察・種子の採集

授業の始めに駒井古実 (環境計画学科) から、(おおまかな科学的造形のプロセスと、生物はどのような形を持っているか、



それらは異なった大きさ、形、模様、色彩、色の組み合わせを持ち、人間の想像をはるかにこえたものが多い。これらを注意深く観察することで、造形の基礎になるのでは!) というレクチャーが教員と学生にしめされた。次に北端信彦 (デザイン学科) から、「種子」とはどのようなものか、又植物がどのように「種子」をまき散らすのかという講義がなされた。

自然観察の場所として、芸大裏山を選び「種子」採集を行う。芸大裏山はクスギ、コナラ、などの雑木林でそれらといっしょに生育する多くの高木、低木、草本、があり、身近にある自然観察の場所として恵まれている。

「種子」採集にあたって共同研究員である神原哲夫・山本善一郎 (美術学科) から学生に採取の方法について説明があり、自然観察のサポートを行ってもらった。採取した「種子」を実習室に持ち帰り種子の顕微鏡を用いた観察、スケッチなどを行う。これらの過程を経て「種子」をテーマとした透かし模様を入れた葉書入れの実習制作に入る。

「種子」をテーマとした透かし模様のデザインを創る上で、種子の採集と観察、科学的分野からのレクチャーから少なからぬ影響をうけた作品が多く見られた。それらの中には種子が地面に散らばっていたその状態をデザイン化した作品、種が風に乗って運ばれる所や弾け飛ぶ様子を現した作品、種が水の中から浮かび上がる状態を幾何学的表現で示した作品などや、種子の生息環境・種子の中の細胞・DNA・進化・知能・未来・種を構成するなかにある直線と曲線などの言葉を使って自作を分析しイメージ化した作品などがある。又授業期間中に開催されていたウィリアム・モリス展を見て、その作品から透かし模様のアイデアを参考にした作品もあった。

今回「種子」というテーマで共同研究授業をおこなってきたが、種子についてのレクチャー、自然観察、種子採集、顕微鏡拡大などは学生にとって自然への視野の広がり、関心度、理解度が深まり造形するうえで知識が増したと思う。

種子というテーマを客観化して造形手法へと結び付けるには、学生にとっても我々にとっても漠然として大きすぎると思われるが、自然環境の中での種子は身近にありテーマとして大きな課題を提示している。又「種子」をテーマに作品を創造することは、私たちが取り組んでいる「身近な自然から造形・環境教育の可能性を探る」になんらかの意味を与えてくれたと思う。

集したもの（伊藤隆）、美術学科2回生造形実習報告 テーマ：種子（神原哲夫）、果実？種子？（下村孝）。

「Higashiyama Newsletter」は芸大付近の自然について、タイムリーな情報を提供するために本年度から創刊された。編集は学生と共同で行った。各号の内容は次のとおりである。0号：陸上にあがった巻き貝 カタツムリ、賢者の巣立ち、ホトトギス、幻夜の蛍、フクロウ、ヘイケボタル、発刊のあいさつ。1号：タマムシ、ヒマワリゲリラ、ノウサギ発見、コシアカツバメの巣、芸大で発見した食べ物、さかさまでおよぐへんなやつ、カブトエビ、ネム、ホウネンエビ、キノガサタケ、ツバメ類。

「共同研究授業」の結果の分析と方法論の検討：昨年度に行った共同研究授業の実施要領は以下のとおりである。①芸大の裏山での自然観察：テーマは「種子」。野外での種子の観察と標本の採集。②自然界に存在するいろいろな「形」の法則のレクチャー、「種子」についてのレクチャー。③双眼実体顕微鏡を用いた種子の形態と構造の観察とスケッチ。④植物の種子の形態その他から造形表現のアイデアチェック。⑤実材実習。⑥結果の分析。分析の結果、このような試みは自然への視野の広がり、関心度、理解度が高まり造形するうえで知識が増したと考えられる。さらに造形教育や環境教育の方法論について検討をおこなった。その成果の一部は「東山469」7号に報告書（62頁）として掲載した。

自然観察会：教材の収集もかねた自然観察会を6回実施した。学生や共同研究者以外の教員の参加があった。

研究の反省

本年度は月に1回程度、芸大周辺の植物・キノコ・昆虫・鳥類分布および生態調査を行う計画であったが、植物以外の調査が十分でなかった。

ニューズレター「東山469」は1月に1回しか発行できなかった。これは編集会議を定期的に行うことができなかったことや、編集や記事の執筆などで分担体制がうまくゆかなかったことに起因すると考えられる。「東山469」は発行までの時間がかかるので、月ごとの芸大周辺自然の紹介という主旨で「Higashiyama Newsletter」を創刊したが、2号までしか発行できなかった。

造形教育と環境教育を目的として昨年度実施した共同研究授業の分析をかなり時間をかけて行ってきた。これと関連して「造形教育と環境教育の方法論」や「創造性教育」などのあらたなテーマが浮上してきたが、いずれも大きなテーマで、問題点が明確になったにとどまった。

「大阪芸術大学所蔵『蓄音機デザイン調査研究』 のための基礎資料作成」

研究年度・期間：平成9年度

研究代表者：出原 栄一

(デザイン学科 教授)

研究ディレクター：福田 肅

(デザイン学科 助教授)

共同研究者：大谷 幹夫 江尻 幹子

(デザイン学科 助教授) (デザイン学科 講師)

研究助言者：鈴木 球也

(大阪美術専門学校 デザイン学科 講師)

研究補助者：柳 知明

(大阪美術専門学校 事務局 課長補佐)

副手(新任) 4~5名

研究目的

本学所蔵の蓄音機について、デザイン(家具・木工)史・文様史・グラフィックデザイン・工業デザイン等の研究資料としての価値が認められるが、視覚的な基礎資料が全く無いため、研究利用の機会が得られないのが現状である。

今回は、今後研究対象となるよう、基礎データの作成を行う。そして、それによって研究対象としての可能性を考察したい。

研究計画・方法

資料の作成

1. 写真撮影 正面・平面(上面)・側面を原則とする三面及び各部分のディテール
2. 写真データの保存 将来の利用を考え、MOディスクに記録。デジタル・カメラの導入
3. 資料の作成 各機種の写真と資料文章の構成
4. 基礎資料の作成 カード化によるデータの整理 外形寸法 年代・形式・生産国等
5. ファイリング コピー等による複写可能な形式

研究経過の概要

資料室の下見 撮影場所の検討

資料と実物の対照

資料1 写真及び名称等 庶務課保管・作成者不明

資料2 大阪芸術大学芸術情報センター・オーディオ資料室「蓄音機リスト」

元情報センター事務職員・柳 知明（研究補助者）作成

これらの資料を検討した結果、購入時に撮影された蓄音機の写真（庶務課保管）に、部品の組み合わせ等の誤りがあることが判明。また、数量にも不明確な点がある。

資料3 大阪芸術大学図書館所蔵・図書

エジソン：20世紀を発明した男／ニール・ボールド・ウイン著；椿正晴訳、他洋書
30冊

撮影準備

エジソン円筒式蓄音機が、小型で撮影箇所も多いように予想されたので、これらの撮影から始めた。資料として、オリジナルを基本とするので、上記資料・図書を元にホーン等の組み合わせを再確認した。

撮影

全体（姿図）、上部（平面図）、各面（立面図）及び部分詳細

資料データ用紙の作成

撮影資料の処理

フォトタッチソフト：アドビ・フォトショップを用い、同・イラストレーターにより写真と文字を構成。MOディスクに保存。

研究成果

現在骨董品的な価値が優先され、我が国で入手できる資料が不完全である。写真資料も全体の外形のみである。そのような状態で、後日どのような目的にも対応出来得る資料の作成を考えた。

97年12月末現在、エジソン円筒式蓄音機の撮影が一応終了した。かなりの時間を要することとなった。が、資料の作成方法（撮影方法とデータ用紙書式）を決定できたのが今回の目的であり第一の成果である。今後同一方法・書式による資料作成を、全機種にわたって行う必要がある。

資料の作成を通じて、蓄音機のデザイン的な価値を考察した。最も大きな価値は、蓄音機器のデザイン史的なものであるが、機械装置の進化とそれを覆う形状の進化を知ることができるだろう。我が国には円盤レコードの完成されたものが移入されたため、それまでの発展過程を研究する資料が少ない。今回研究対象としたエジソンの円筒式蓄音機が、円盤レコード蓄音機のデザインにどのような影響を与えたかは、今のところ不明である。エジソンは速記を助ける録音再生機を考えていたので、円盤レコード用の蓄音機が製造販売されてからも、録音再生が可能なシリンダー型蓄音機の製造を続けていた。したがって、新しいデザインの円盤レコード用蓄音機とシリンダー型蓄音機が同時に製造されていた時期があった。

研究の反省

デジタルカメラの導入

現像等の省略及び資料作成のコンピューター利用を考え、デジタルカメラを導入したが、様々の設定が必要であった。撮影結果をテレビモニターで確認できるが、コンピューターに取り込んだ画像が良好であるとは限らない。一部撮り直しが必要である。コンピューターによる確認が直ちにできるように、撮影場所にコンピューターを設置することが望ましい。

トーマス・アルバ・エジソン (Thomas Alva Edison 1847～1931) 年譜

1877 (明治 10) 年 12 月 錫箔式フォノグラフを發明・**ティン・フォイル一号機の製作**

1878 年 1 月 エジソン・スピーキング・フォノグラフ社設立

一号機「Improvement in Phonograph or Speaking Machine」を特許申請

ティン・フォイルの製造 (500～600 台で製造中止)

白熱灯・発電の開発に専念

1888 年 ベル、ティンター、ベルリナーらの蓄音機改良

6 月 ワックス・シリンダー使用の改良型蓄音機「Perfected」を発表

ジェシー・リビンコットがノース・アメリカン・フォノグラフ社を設立。エジソンの蓄音機とレコードを一手に販売

1889 年 エジソン・ノースアメリカン・クラスM・E

1894 年 フランスのリオレットにより、セルロイドのシリンダーが開発される

1895. 6 年 ゼンマイ (Spring motor) 式フォノグラフを開発

エジソン・スプリングモーター式蓄音機

1896 年 エジソン・ホームA型スーツケース型

1898 年 エジソン・スタンダードA初期角型ケース

1899 年 シカゴのランバートによる、セルロイドのシリンダーが開発される

エジソン・ジェム初期型箱なしA型

ベルリナーの円盤式レコード・蓄音機が玩具会社

ケメラ・ウント・ラインハルトから製造販売される

1900 年 ランバートによる、セルロイドのシリンダー・レコード発売

エジソン・ジェム初期型箱付き型

1901 年 再生専用音楽レコード、ゴールド・モールデッド・レコードの生産開始

エジソン・ジェムA型

再生機「C型」開発・サファイア針を使用

エジソン・スタンダードA型新型

1904 年 エジソン・ホームA型

1905 年 エジソン・スタンダードB型新型

- エジソン・ビジネス蓄音機
- 1906年** エジソン・スタンダードA型
- 1908年** エジソン・ジェムC型
エジソン・スタンダードD型
- 1909年** エジソン・ジェムD型
エジソン・ファイアサイドA型
- 1910年** エジソン・トライアンフE型
エジソン・アンペローラ・1号
グラモフォンが円盤の音楽レコードを多量に生産
- 1912年** ブルーアンペロール（青色セルロイドのシリンダー）レコードを発売
エジソン・トライアンフ後期型
エジソン・オペラ
ダイヤモンド針を用いた、ダイヤモンド・ディスク・フォノグラフ及びダイヤモンド・ディスク・レコードを発売
- 1915年** エジソン・アンペローラ・75
- 1921年** エジソン・エディフォン卓上機
- 1923年** エジソン・エディフォン・フロア型
- 1925年** 電気録音によるレコードの開発
- 1929年** 蓄音機・レコード生産中止
- 1930年** エジソン・ディクタフォン

追記 なお、研究成果発表を兼ねた展覧会「**大阪芸術大学コレクション—蠟管蓄音機の世界—**」を、1999年3月31日（水）～4月20日（火）の期間、伊丹市立工芸センターにおいて開催した。

大阪芸術大学コレクション

—蠟管蓄音機の世界—

平成9年度大阪芸術大学藝術研究所調査補助費による

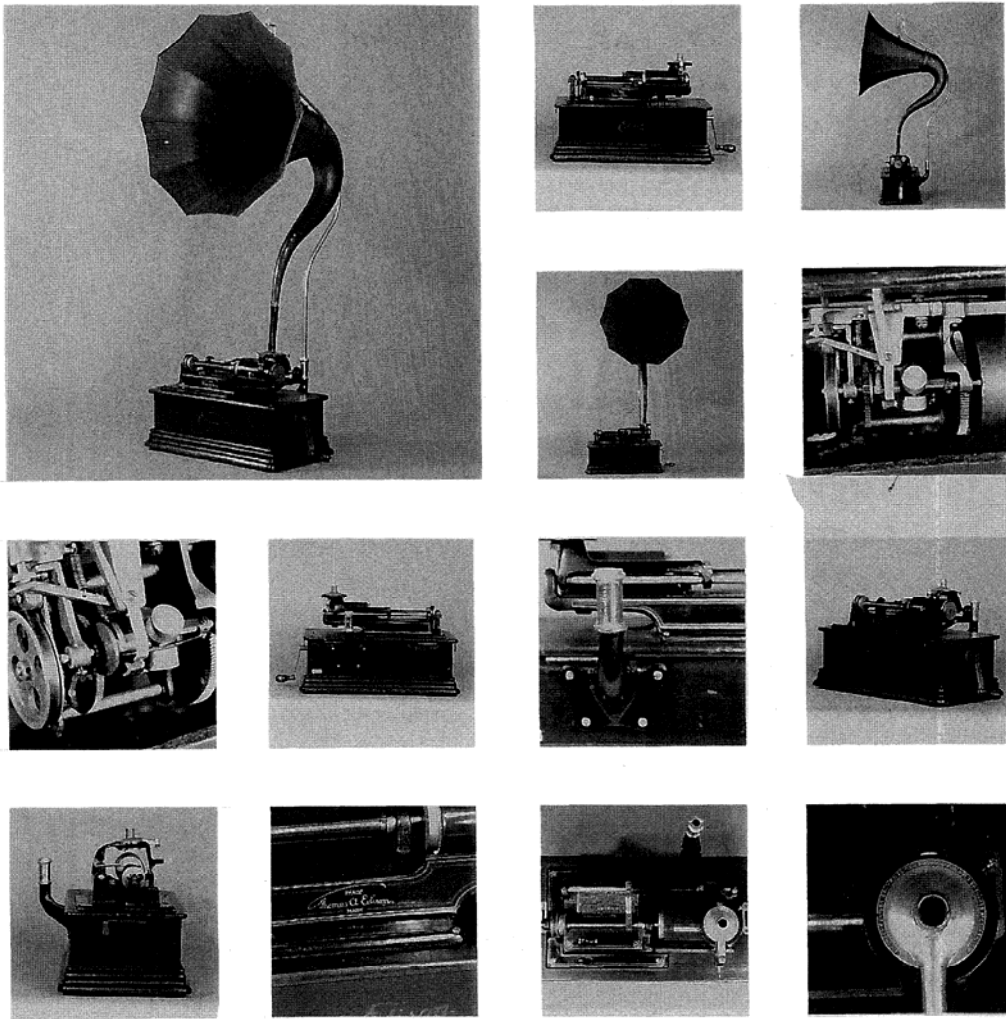
「蓄音機デザイン調査研究」

デザイン学科 出原栄一・福田 肅・大谷幹夫・江尻幹子

主催＝伊丹市・伊丹市立工芸センター 後援・協力＝塚本学院・大阪芸術大学

1999年3月31日（水）～4月20日（火）入場無料

10：00am～6：00pm（入館は5：30pm 最終日4：30pm迄）月曜日休館



HOME MODEL E

エジソン ホーム モデルE 1911~1912 (明治 44~45) 年 アメリカ

EDISON HOME model E 1911-1912 USA

「トライアンプ モデルE」と同様、2分と4分のシリンダーが使えるように「モデルO」リプロデューサーを採用し、そのため、大型のキャリアームが付けられている。標準のキャビネットはオーク製。価格は、45ドル。

「能面の音響特性とその音声への影響」

研究年度・期間：平成9年度～平成10年度

平成9年度

研究代表者：馬淵卯三郎

(音楽学科 教授)

研究ディレクター：中山 一郎

(音楽学科 教授)

共同研究者：秋浜 悟史 ・ 居原作郎
(舞台芸術学科 教授) (芸術計画学科 教授)

山田 真司

(音楽学科 助手)

研究助言者：林屋辰三郎 杉藤美代子
(京都大学 名誉教授) (大阪樟蔭女子大学 名誉教授)

天野 文雄

(大阪大学 文学部 教授) (榊竹中工務店技術研究所 課長)

研究補助者：吉武奈津子

(音楽学科 副手)

平成10年度

研究代表者：月溪 恒子

(音楽学科 教授)

研究ディレクター：中山 一郎

(音楽学科 教授)

共同研究者：秋浜 悟史 ・ 居原作郎
(舞台芸術学科 教授) (芸術計画学科 教授)

山田 真司

(音楽学科 助手)

研究助言者：杉藤美代子 天野 文雄
(大阪樟蔭女子大学 名誉教授) (大阪大学 文学部 教授)

日高 孝之

(榊竹中工務店技術研究所 課長)

研究経過の概要

演能においては、シテ（及び、シテツレ）は、一般的には面（オモテ）を着けて演ずることが多い（着面）。一方、ワキ、及び地謡は面を着けない（脱面）。それ故に着面によって、シテとそれ以外の役の発する音声の音響的特徴には差異が生じ、一般的にはシテの音声の音色は“くぐもって”聴取されることは日常的に経験することである。

しかしながら、このような影響・効果をもたらす面そのものの音響特性については、面の視覚的側面からの研究が諸家によって多数行われているのとは対照的に、これまで全く行われていない。また、この音響特性が、演能中の音声に具体的にどのような変化を及ぼすのか、また、そのことが、能楽というものの様式の構築にどのように作用するのかについても、研究は全く行われていない。

このような背景のもとに、本研究は、次の項目について研究を行った。

① 多数の面について、面そのものの音響特性、及びそれを生じさせる原因を明らかにした。測定面は、佐野家（大阪・四天王寺）所蔵の文化財級を含む11面（大癒見（江戸時代）、三光尉（大宮大和打）、平太（近江打）、小面（河内打）、鼻瘤悪尉（児玉近江打）、黒般若（出目洞水打）、邯鄲男（同打）、孫次郎（友閑打）、若女（児玉近江打）、真蛇（赤鶴打／大変な古面）と、北澤耕雲打の2面（若女、般若（昭和時代）、及び小倉宗衛打の7面の最新面（孫次郎、

泥眼、深井、今若、景清、小面、中将（後の2面は研究用に買い上げ）の、合計20面である。

② ①で得られた音響特性が、具体的に音声の音色にどのような変化・影響を及ぼすのかについて、まずは研究の第一段階として日本語の清音を対象として、面としては演能で用いられる代表的な女面の一つである孫次郎（小倉打）を用いて、面の着・脱によって生ずる、発声音声の音色変化についての評価実験を行った。

このような、①面の音響特性の測定、及び②面の着・脱による音声の音色変化の評価実験は他に類例がなく、無論、本邦（即ち、世界）初である。

研究成果について

① 面そのものの音響特性、及び、それを生じさせる原因を明らかにした。

実験は全て無響室内で行った。音源としては、実頭からの音声の放射特性を模し、かつ再現性に優れたヘッド&トルソー・シミュレータ（いわゆる“しゃべるマネキン”（Blünel & Kjaer/Type 4128））を用い、それに面を装着して、音源からホワイト・ノイズを発生させ、着面時と脱面時に得られる放射音場の差から、面そのものの音響特性を得た。

その結果、面の周波数特性として各面に共通して、1) 1 kHz 付近の音圧上昇（面と顔面との間の空気がバネとして作用することによる共振）、2) 1.3 kHz、及び3 kHz 付近の鋭いディップ（面が「くし形フィルタ」として作用することによる）、3) 中・高周波数領域での音圧減衰、という能面の音響特性の全貌が明らかとなった。

② 面の着・脱による音声の音色変化の評価実験を行った。

まず、無響室内で脱面時における原音声（日本語の清音（45音節））の収録を、3人の舞台経験の豊富なシテ方（うち一名は人間国宝）について行った。続いて、この原音声を上述のヘッド&トルソー・シミュレータに入力し、シミュレータに着面（面：孫次郎）した時としない時（脱面）の音声を収録し、これを面の着・脱による音声の音色変化を評定するための音素材とした。このような音素材を用いることにより、面の音響特性のみに起因する音色変化が抽出できることになる。各音節につき面の着・脱時の音声を一対として、両音声間の音色の類似度評価を、被験者（男女各5名の合計10名）にヘッドホン両耳受聴で行わせた。

その結果、1) 音節によって類似度が異なり、一般的に母音に/i/、/e/を持つ音節は面の影響を受けやすく、逆に母音に/o/を持つ場合は影響を受けにくい、2) 発声者によって変化を受けやすい音節が多少異なる、3) 音色の変化は、主として面の中・高周波数領域（音声の響きを左右すると考えられている“singing formant”領域を含む）での音圧の減衰特性によって生ずる、ことが明らかになった。

研究の反省及び今後の課題

1) 今回の多数面についての音響測定で、面の音響特性はほぼ解明できたと考えられるが、引き続き佐野家の残りの面、及び他家所蔵の面について音響測定を行う。2) 今回の音色変化

の評価実験によって、どの音節が変化を受けやすいかを明らかにしたが、それでは具体的にどのように変化するか（音色評価語で、例えば“くぐもる”、“柔らかくなる”、等々）を、清音以外の音節も含めて明らかにする。3) 今回は音色評定のために、脱面時の原音声をシミュレータに入力し、シミュレータに着面した時としない時の音声を収録し、これを評定実験用の音素材とした。これは、面の音響特性のみに起因する音色変化を抽出するためであり、この方法により、発声者が面を着けて、及び外して別々に発声する際に生ずる、音色評定にとって不都合な人為的な不確定要素（例えば、発声音高や抑揚の付け方の違いや、発声法そのものの違い、等々）を排除することができた。しかし、当然のことながら面は発声者自身が着けるものであり、将来はそのような場合についても実験を行いたい。そうすることにより、面の装着によって音声に変化を受ける事は確実であるが故に、「名人とは何か？」というテーマの解明の糸口となるものと考えられる。

このように、本研究テーマは興味ある多数の内容を含んでおり、「能とは何か？」という日本文化の根幹をなす問題に、音声の面から解答を与えることが可能であると期待できる。

「多媒体利用による本学の教材の研究と開発」

－ 大阪府下の民家 －

研究年度・期間：平成9年度～平成10年度

平成9年度

研究代表者：藪 亨

(教養課程 教授)

研究ディレクター：田中 敏雄

(教養課程 教授)

共同研究者：吉村 堯 豊原 正智

(教養課程 教授) (芸術計画学科 助教授)

山形 政昭 大橋 勝

(建築学科 助教授) (芸術計画学科 講師)

木原 俊哉

(音楽教育学科 講師)

研究補助者：渡辺 力也

(芸術計画学科 副手)

平成10年度

研究代表者：藪 亨

(教養課程 教授)

研究ディレクター：田中 敏雄

(教養課程 教授)

共同研究者：豊原 正智 山形 政昭

(芸術計画学科 教授) (建築学科 教授)

木原 俊哉 大橋 勝

(音楽教育学科 助教授) (芸術計画学科 講師)

研究助言者：吉村 堯

(元 教養課程 教授)

研究補助者：池田 充 渡辺 力也

(芸術計画学科 副手) (芸術計画学科 副手)

研究経過の概要

今年も昨年同様に大阪府下、特に南部に所在する民家（商家、農家）の取材と撮影を継続して行った。まず吉村堯先生から取材先の選定と取材許可をとってもらって撮影日時を決定する。第一回目は平成10年9月10日に行った。まずはじめに降井家（重文・泉南郡熊取町）に行き書院の外観・内部の撮影とともに御当主から建物についての聞き取りをする。中家は財団法人で熊取町が管理しているので、外観・室内とも自由に撮影することができた。さらに、同じ熊取町の七里本家へ行く。ここは住まいなので外観だけを撮影した。次に奥家（泉佐野市）へ行く。ここも建物の外観だけを撮影する。次に広海家（貝塚市）に行き、建物の外観と土間・室内を撮影する。ここでも建物をお守りしている人から聞き取りをする。次に利齋家（貝塚市）に行き、外観と室内を撮影する。御当主から聞き取りをする。堺市に移動して和田家住宅を撮影する。ここでも聞き取りをする。

二回目は2月3日に行った。この日は大学の付近を中心に取材した。はじめは富田林市の寺内町の旧杉山家住宅（重文）で、外観・土間・室内の撮影を行う。この家は歌人石井露子の実家でもあり、土蔵を改装した資料室も撮影する。さらに寺内町に残っている旧家中村家・南葛原家などの他の民家や古い街並みを撮影する。また寺内町から少し離れたところに所在する南葛原家の洋館の別荘も外観のみを撮影する。最後に吉村堯先生の住宅でもある吉村邸を撮影する。吉村先生御自身の案内で、外観・土間・室内を撮影する。

平成9年、10年にわたる大阪府下の民家の撮影は終了した。当初の計画通りほぼ撮影することができた。そして2月25日に共同研究者が集合してビデオの試写を行い、映像教材としての構成方針を検討した。

研究成果について

古い民家は現在、生活習慣や環境の変化、行政の土地有効利用指導等のもと壊されたり改築されたりして、昔の姿を失いつつある。そのことを惜しむ気持ちからこの研究は始まったわけだが、平成9年、10年と2年間にわたる民家の撮影と調査によってさらにそのことを実感することができた。実際に古い民家が朽ちていくところを撮影することができたし、今は住んでいなくてこれから取り壊される可能性の高い民家も映像で残すことができた。

◎ 対象地域—大阪府南部（中・南河内・泉北・泉南）の民家から、大阪市平野区を北端とし、泉南郡熊取町を南端とする範囲の内から、町家と農家計23件を対象として抽出した。

《国指定重文民家8（町家3、農家5）大阪府指定文化財2（町家1、農家1）を含む》

◎ 全般的傾向—内部まで調査できた民家の殆どは客室部を持つ上層民家で、地域ごとの特殊性はさほど目立たず、むしろ家ごとの意匠・構造に顕著な個性が見られた。また対象外とした民家の中にも、昔の面影を色濃く残したものや殆ど改装の跡を意識させない工夫を凝らしたものも意外に多く残っていたが、惜しまれながらもやむを得ず取り壊されたものもあり、現代風住宅群に変貌した集落の中に取り残されたように古風な民家が残る例の方が、圧倒的多数であったことは、時の流れの生み出す必然的成果と見る他ないのであろうか。

平成9年、10年の2年間で撮影した民家

藤井寺市 今仲家（外観）、松村家（外観）

狭山市 吉川家（外観、室内）

羽曳野市 銀屋（外観、船板壁）、吉村家（外観、室内）、松村家（外観、室内）

松原市 西川家（外観、室内）、中山家（外観、室内）

相原市 三田家（外観、室内）

大阪市 奥田家（外観、室内）

堺市 高林家（外観、室内）、山口家（外観、室内）、和田家（外観、室内）

熊取町 降井家（外観、室内）、中家（外観、室内）、七里本家（外観）

泉佐野市 奥家（外観）

貝塚市 広海家（外観、室内）、利齋家（外観、室内）、寺田家（外観）

富田林市 旧杉山家（外観、室内）、中村家（外観）、木口家（外観）、南葛原家別荘（外観）

以上当初のほぼ予定通りに撮影することができた。今回も吉村堯先生の指導と渉外によるところが多かった。予定通り撮影が行われ、外観・室内・調度品等古い民家の機能性・意匠性の面白さを映像におさめることができた。この映像資料を元に民家を紹介する教材を制作した。

研究の反省

ほぼ予定通りの件数の民家の撮影を終えることができた。ただ撮影には取材先の事情もあり、撮影不可のところも多数あった。民家の外観は全て撮ることができたが、内部については住居として使用しているものは撮影許可の取れないものが多く、完全とは言えない。また、撮影に重きを置いてきたので、建築の構造や様式についての歴史的調査に関しては文献調査等が不十分なところがあったと思う。この点については、ビデオの編集段階でナレーションやスーパーで補っていく。またかなりの強行スケジュールで取材を行ったため、細かな撮り残しがあったのではないかと多少の不安は残っている。しかし学生が民家に対して興味を抱くための導入口としては、魅力ある教材ができたのではなかろうか。今後の課題としてはこの教材を用いることによってどのような教育効果が得られるかを確認していくことだろう。この事に関してはまた次の機会としたい。

「中近東・アジアの古代建築・庭園・都市環境に見る 尺度構成理念に関する調査研究」

研究年度・期間：平成 10 年度

平成 10 年度

研究代表者：藤本 康雄

(建築学科 教授)

研究ディレクター：藤本 康雄

(建築学科 教授)

共同研究者：田端 修

(建築学科 教授)

樋口 文彦

(建築学科 教授)

研究報告

研究経過の概要

西洋中世の新都市と古代ギリシア・ローマの植民都市について、295^m/₁₀₀前後のローマ尺もしくはイオニア尺による大単位モジュール格子が、それらの平面構成に見られるという事象を、今回はさらに地域を小アジアから中近東そしてアジアに拡張、中世・古代を問わず都市・建築の様式も限らずに、いわば殆ど無作為に相当と思える資料によって、ローマ尺相当尺の使用を検討することにした。その詳細については、大阪芸術大学紀要「藝術 22, 1999」に発表済みであるが、以下にその要点を抄録して成果報告とする。

1. 古代東方

・古代ギリシア：エピダウロスの劇場

古代ギリシアのエピダウロスの劇場は紀元前 350 年頃の設計で、円形のオルケストラ中心点に 20 ローマ (イオニア) 尺格子を合わせると、各部が見事な照応を見せる。オルケストラ内円直径が 70 尺、外円直径が 90 尺、中段通路までのテアトロン下段半円半径が 130 尺、同上段外縁半円半径が 200 尺、スケネ東西幅 90 尺、奥行 20 尺、東西入口間 160 尺等々である。

・アッシリア：サルゴン II 世のホルサバド城市と宮殿

アッシリアのホルサバドはサルゴン II 世 (前 721-704) によって築かれた城塞都市で、東西・南北それぞれの市壁長は 5500 尺、6000 尺、5800 尺、6000 尺と見られ、内城は南壁が 900 尺、北壁が 1000 尺、東壁が 2200 尺などに見込まれる。サルゴン II 世の宮殿では、第 1 の中庭が長方形平面で大きさは間口 100m、奥行 87m で実に 340 尺と 295 尺であって、カロリング尺とローマ尺の比に等しく、長辺で正三角形が内接する神秘的な形をなす。第 2 の中庭は正三角形 2 連の図形が含まれる。ジグラットは 141 尺角となり、100 尺に対し $\sqrt{2}$ 倍の長さになり、ローマ矩尺の

応用が想像される（図1）。

◦ ペルシア：ペルセポリス

ペルセポリスはダarius王が前520年頃築いた。およそ1600尺×950尺の基壇上に建つ。謁見の間アパダナは内法200尺×200尺、その西壁内面線の延長上に、120尺×120尺のクセルクセス門の外壁が来る。クセルクセスの広間が100尺×100尺と見える。百柱の間は東西が240尺、南北も240尺である。

2. 小アジア

◦ パルチア王朝・ササン王朝：ハトラとフィルザバード

前3世紀半ばのイラン高原北部パルチア王朝の代表的遺跡ハトラはほぼ円形をなす。中央部に聖域があり、その東部分はちょうど1000ローマ尺四方、西部分はその半分で1000尺×500尺である。東部分方形の南西隅を中心に半径3000尺の円を描くと市の全域がこれに納まり、同じ中心で半径4500尺の円を描くと、外城壁の位置がこれに近くなる（図2）。

◦ シリア：パルミラ

シリアのパルミラ遺跡の中心に四面門が立ち、東西に列柱道路が伸びる。東へ1000ローマ尺のところに記念門。門から800尺のところに、ベール神殿の3連入口部分が来る。四面門の西2000尺のところに城壁跡の一部が来る。各遺構の位置関係を格子構成をもとに整理することで、パルミラの都市計画とその推移を明らかにする手掛かりが得られるかも知れない。

◦ ダマスクス：大モスク

シリアに進攻したイスラムは、ダマスクスにあった洗礼者ヨハネの教会堂を解体し、モスクに転用した。全体構成は旧のままで、東西500尺南北340尺、新しいモスクの南北幅は140尺等、ローマ尺格子構成の踏襲は明らかである。

◦ バクダート：円形都市

762年に築かれたバクダートの円形都市の復元では、円形プランが選ばれ直径がローマ尺で約9000尺となる。2重の円形街区を連ね、その内側に直径5300尺の円形広場がある（図3）。

◦ バビロン：ウハイデル宮殿

バビロンのウハイデルの宮殿は、560尺×600尺という広大な外構壁に囲まれ、内城壁も260尺×360尺の大きさを100尺×120尺の中庭を持つ。

3. インド・ネパール地方諸時代諸建築

◦ モヘンジョ・ダロ

紀元前2500年から前1500年にかけて栄えたインダス文明遺跡として、パキスタンのモヘンジョ・ダロとハラッパーが知られる。その都市域は長方形だったとされ、東西約3600尺、南北約4000尺と見られる。中庭と覚しい部分を囲んで住宅の多くが、100尺四方の部分を含んで成り立つ。

◦ アグラのダージ・マハル

北インドにアグラのダージ・マハルはその景観美で知られるが、1632年から54年にかけて建てられた大庭園墓廟である。前庭・中央庭園・墓廟の3部分からなり、順に1000尺×500尺、1000尺×1000尺、1000尺×350尺の大きさである（図4）。

・タンジャーヴール：ブリハディーシュワラー寺

インド南端タンジャーヴールで、1003年から1009年にかけて建てられたブリハディーシュワラー寺はシヴァ神を祀る（図5）。四周は814尺×406尺と算定でき、2：1長方形をなす。中央大祠堂の神室（30尺×30尺）の中心を起点とし、西へ200尺で壁内小室中心、東へ600尺で東門中心が来る。本祠堂基壇は実に100尺×100尺、起点から400尺のところの巨大牡牛像を祀るナンディー堂がある。その他各部にローマ尺相当の適合が見られる。

4. 中国・日本の都城と結論

中国陝西省西安にあった隋・唐の長安城（581, 618～）は東西がほぼ33000尺、南北はほぼ30000尺の外郭をなすと見られる。東西道路は2000尺間隔に、南北道路は中央道路両側街区画が2000尺、皇城域の両側を通る道路の間隔は10000尺だったと見られる。同じく隋・唐の洛陽城（605）では、東西25000尺、南北24000尺と見られ、南北道路は2000尺間隔、東西道路は北部では2000尺間隔である。皇城域は10000尺×9000尺の一画を占める（図6）。

以上の事例のすべてにわたって、ローマ尺相当尺による完数モジュールによる格子構成が見られた。これは単なる偶然か、あるいは人体尺の当然の結果と見るべきか、いずれにせよ以上のような尺度比較を試みたのはわれわれが最初である。

一般識者はルネサンス以来の比例美論に慣れ過ぎて、建築・都市における実尺の問題を職人業として軽んじて来たきらいがある。そして都市・建築平面解析は、これまで機能的・形象的に留まっていた。また、商取引・課税本位に偏して地域差を当然とし、建築尺度の共用性を忘れて来たのではあるまいか。メートル法の強制に伴う資料の精度について問題はあろう。建築遺構の複雑に摩耗した石組み類の採寸誤差もある。図化に際して微妙に歪みのある実測図を適当に整え、まるめて製図することは十分考えられる。しかしそこでも概ね1/100を越える寸法誤差はないとしてよいであろう。資料は一種の概念図というべきで、それだけにローマ尺の完数による部分照応という事実が認識されてよい。

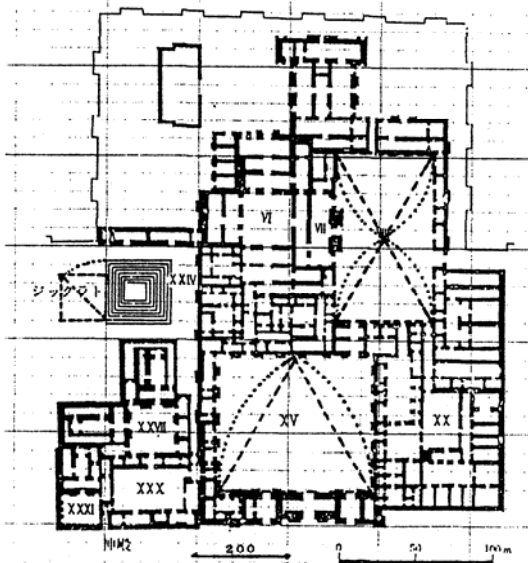


図1. サルゴンⅡ世の宮殿

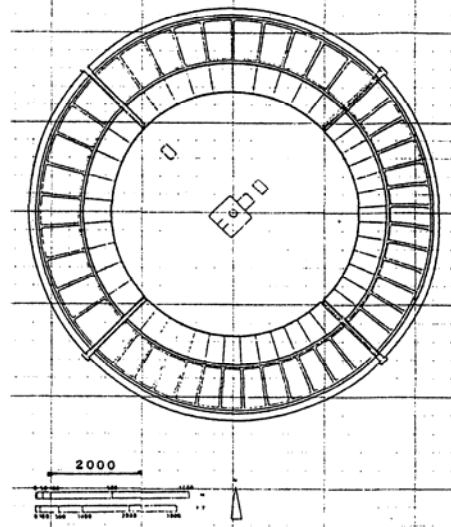


図3. バクダード：「円形都市」復原図

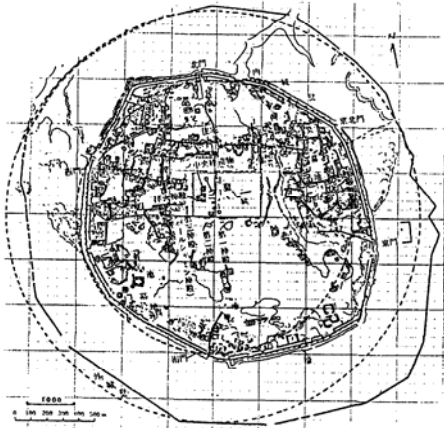


図2. バルチア王朝：ハトラ

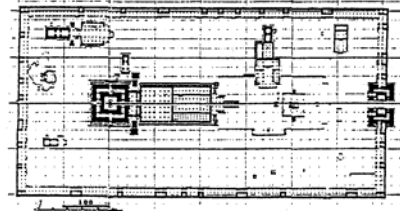


図5. タンジャーグール：プリハディーシュワラ寺

図6. 隋・唐の洛陽城

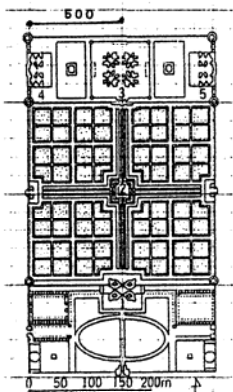


図4. アグラのタージ・マハル

